

子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方について

(答申)

令和8年3月12日

京都市社会教育委員会議

目次

1 はじめに

- (1) 背景 1
- (2) 読書専門部会 1

2 子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方について <協議内容>

- (論点1) 読書活動の意義と発信について 3
- (論点2) 家庭・地域・学校等の役割について 4
- (論点3) 多様な子どもたちの読書機会の確保について 6
- (論点4) デジタル環境の下での読書活動の推進について 7
- (論点5) 京都ならではの魅力に親しむ読書について 8
- (論点6) 子どもの視点に立った読書活動の推進について 8

3 意見まとめ

- (1) 読書活動の意義と発信については 10
- (2) 家庭・地域・学校等の役割については 10
- (3) 多様な子どもたちの読書機会の確保については 11
- (4) デジタル環境の下での読書活動の推進については 11
- (5) 京都ならではの魅力に親しむ読書については 11
- (6) 子どもの視点に立った読書活動の推進については 12
- (7) 取り組むべき基本方針 12

(参考資料) 京都市の子どもの読書活動の現状

- (1) 第4次京都市子ども読書活動推進計画(平成31年4月～令和8年3月)の取組状況 13
- (2) 令和7年度 児童・生徒の読書の実態を把握するためのアンケート調査について 14

1 はじめに

(1) 背景

京都市における子どもの読書活動推進については、これまで「子どもの読書活動の推進に関する法律」を踏まえ、「京都市子ども読書活動推進計画」を平成16年度に策定し、以降、改定を重ね、現在は第4次計画が進められている。

第1次計画の策定以降、約20年にわたって、家庭、地域、学校等が連携・協力して子どもの読書活動のために様々な取組を行っている。

一方で、子どもの読書活動の実態は、全国的な調査結果によると、上記法律が制定された平成13年度と比較して、どの校種も平均読書冊数は増加しているものの、不読率は学年が上がるにつれて上昇傾向にあるとされている。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大後の生活の変化や、GIGAスクール構想による学校のICT環境の整備等により、子どもたちを取り巻く環境は加速度的に変化している。

実際、子どものインターネットの利用率は、「青少年のインターネット利用環境実態調査」(こども家庭庁)によると、4次計画策定時の令和元年度は9歳以下が57.2%、10歳～17歳が93.2%であったのに対し、令和6年度は9歳以下が78.5%、10歳～17歳が98.2%であり、第4次計画期間で大幅に増加した。さらに、令和7年度に京都市が実施した、「児童・生徒の読書の実態を把握するためのアンケート調査」において、高校生が自由に使える時間に何をしているかという質問では、「テレビや動画配信サービスを視聴する」「SNSで、投稿やメッセージ交換をする」が上位にくるなど、本を読むことに時間を割くことが難しい時代となっている。

他方、インターネットの普及により、書籍へのアクセスの利便性は増し、いつでも、どこでも紙の書籍や電子書籍を購入したり借りたりできるようになるとともに、デジタルコンテンツをきっかけとした読書の機会が増えるなど、社会環境やライフスタイルの変化が新たな読書環境の向上に役立っていることも確かである。

この答申は、社会情勢の急速な変化や現行の計画の成果や課題等も踏まえ、新たに「京都市子どもの読書活動推進のための取組指針」を策定するため、家庭、地域、学校等が中心となり社会全体で取り組む今後の「子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方」について、京都市社会教育委員会において多角的な視点から協議を行い、その結果をまとめたものである。

(※京都市の子どもの読書活動の現状については、巻末の(参考資料)を参照)

(2) 読書専門部会

ア 概要

「京都市子どもの読書活動推進のための取組指針」の策定にあたり、教育長から社会教育委員会へ「子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方」についての諮問が行われたことを受け、同会議において、より専門的・集中的に協議するため、「京都市社会教育委員の会議規則」第6条に基づき、読書専門部会を設置した。

イ 設置期間

令和7年5月1日～令和8年3月31日

ウ 委員

	職名（令和8年3月1日時点）	氏名
委員 （五十音順）	茶道総合資料館副館長	伊住 禮次朗
	一般社団法人京都市地域女性連合会理事	豊田 まゆみ
	歌人、京都大学大学院農学研究科研究員	永田 紅
	京都新聞社文化部編集委員兼論説委員	◎松田 規久子
外部特別委員	京都ノートルダム女子大学教授	○岩崎 れい

◎部会長 ○副部会長

エ スケジュール

令和7年 3月 教育委員会から社会教育委員会議へ諮問
5月 第1回読書専門部会
7月 第2回読書専門部会
10月 第3回読書専門部会
令和8年 2月 第4回読書専門部会
3月 社会教育委員会議から教育委員会へ答申

2 子どもの読書活動推進に向けた取組の在り方について <協議内容>

(論点1) 読書活動の意義と発信について

○背景

- ・「読書は大切だと思うか」という問いに対して、多くの児童・生徒・保護者が、そう思うと答えている一方で、発達段階が上がるにつれて、読書量は減っている状況がある。
- ・SNSやインターネットなどの情報には毎日接している児童・生徒も多く、知識、情報を得るための手段が、本だけではなくなっている。
- ・児童生徒の多様な価値観の中で、楽しむための読書、娯楽としての読書という発信だけでは、他の楽しみに対抗できない状況がある。

○議論のポイント

- ・限られた時間の中で、読書をしたり、読書の優先順位が上がったりするようきっかけを作るための、社会の変化を踏まえた読書活動の意義について
- ・読書活動を推進するための、子どもや保護者、学校等への効果的な発信について

○主な意見

<読書活動の意義について>

- ・脳科学から見た読書活動の意義として、主なものは、言葉の意味を補う「想像力」(行間を読む能力)が自然に高められること、自分の言葉で「考える力」が自然と身に付くこと、これらの能動的な読書体験が脳の働きに変化をもたらし、日々の成長を促し、子どもたちの心の発達を支えることである。
- ・読書によって自分とは異なる人の考えに触れる経験を通して、悩みを抱えるなど、子どもが困難に直面したときに、読書が大きな手助けになる。
- ・読書活動ができる環境は、子どもの精神的な発達の面で大事なものであるだけでなく、もとより子どもの基本的な権利である。
- ・読書は必ずしも自力で読む行為に限られるものではなく、読み聞かせや音声、対話を通じて言葉や物語に触れる経験も含まれる。
- ・読書の効果として「言葉を知る」「知らない世界を知る」「集中力が養える」「他者と出会う」などがあげられる。
- ・マンガにも「行間を読む力」を養える側面があり、読書の入口や想像力の涵養に通じる。
- ・子どもの読書活動を支えるべき大人自身の知的好奇心が薄れているように思われ、読書離れが顕著。社会課題の解決に向けて、想像する・深掘りする・考える力をつけるためには、必ず読書経験が必要である。

<効果的な発信(内容)について>

- ・保護者が負担感なくできる、子育てにとってメリットになる発達段階に応じた現実的方策を伝えられたらよい。
- ・子どもが本に出合っていくきっかけが大事である。
- ・子ども向けの本にとらわれず、色んな本に触れる機会を作ることが大事である。

- ・読書をすることが、大人から子どもへの押し付けになってはいけない。
- ・大人が子どもの成長段階に応じて、自分の読書体験を自らの言葉で伝えることが大事である。
- ・動画配信サービスなどでの本の紹介動画が読書の入口になることもある。

（論点2）家庭・地域・学校等の役割について

○背景

- ・全ての子どもが本に接することができるようにし、読書活動の恩恵を受けられるようにするためには、家庭・地域・学校等が中心となって社会全体で取り組む必要がある。

○議論のポイント

- 主に、「本を読まない」、「時間がない」、「読みたいと思う本がない」、「興味が
ない」という児童生徒とその家庭に関して、発達段階の視点も入れながら、
- ・家庭や子どもたちにとって望ましい啓発活動について
 - ・地域（図書館等）ができること、望まれることについて
 - ・学校ができること、望まれることについて

○主な意見

<読書をするきっかけ、興味関心へのアプローチについて>

- ・大人が子どもの本の世界を広げるきっかけを用意していくことが大事である。
- ・子ども全体を対象とした面での取組に加え、家庭環境や、年代別、校種別など、対象を絞ったピンポイントの対策も考えていくことが必要である。
- ・子どもの本の世界を広げるには近道はなく、目の前の子どもに応じた取組を積み上げるのが大切。
- ・幼児・児童には、幼稚園・保育所・小学校での取組を大切にし、中高生には、友人や上級生など、身近な人とのつながりの中で本を薦め合ったり、本人の意思を尊重しつつ、大人として扱って本を薦めたりすることが有効ではないか。
- ・読書をするきっかけ（興味関心へのアプローチ）も多様であるとよい。例えば、文字の苦手な子どもには、紙の本だからこそその感触や手触り感、光沢などを切り口とする取組はどうか。
- ・食卓に、読み掛けの本をさりげなく伏せて置いておく、トイレに本棚を作るなど、思わず手に取ってしまうような、自然に本に触れるきっかけをつくる工夫が有効ではないか。
- ・啓発的・教育的な働きかけだけでなく、子どもや若者固有の価値観や文化に寄り添って考えることも大切である。
- ・日本では、ブックカバーを掛けて本を読んでいる姿をよく見かけるが、ヨーロッパでは他人の読んでいる本のタイトルをきっかけに会話が生まれる。自分が読んでいる本を他者と共有する意識が、本との出会い、読書への興味関心につながるのではないか。

・例えば、スポーツ活動に忙しい子どもは本を読まないイメージがあるかもしれない。しかし、そのような子どもも自分のスポーツに関する本なら手に取る。接点があれば、そこから読書の世界が広がっていく。スポーツ、料理など、さまざまな興味関心に合った本との巡り合いを作れたらいいと思う。

・文字を読むのが苦手な子、本を読まない子にとっては「図書館」「座って読むこと」に対するハードルが高い。堅苦しくない読書の在り方を考えられないか。

<家庭への働きかけについて>

・乳幼児期の子ども保護者には、「寝る前に読むと、子どもが落ち着いて寝ることができる」など、読書が子育ての手助けになるというメッセージを伝えてはどうか。

・出生届の提出時に、京都市から記念に子どもの名前や誕生日を記した本をプレゼントすると、親子で本に触れるきっかけにつながるのではないか。

・家庭での会話が少なくなる思春期の子ども保護者には、本が現実世界と離れたものであるゆえ、思春期の子どもとでも共通の話題となりやすいというメッセージを伝えてはどうか。

・家庭への働きかけは、学校を通して行うことが一番届くのではないか。

・他の家庭での読書の取組を知る機会があると、保護者の気付きにつながる。

・読み聞かせについては、文字が読めるようになった小学生以降も大切である。

・親が忙しくて、読み聞かせや一緒に図書館に行く習慣がない中で、手触り感のある読書のタッチポイントをどうやって作っていったらいいか。

<地域（図書館等）ができること、望まれること>

・ブックトークの研修を取り入れてはどうか。

・子どもの本コンシェルジュの方は小学生向けのスキルが非常に高いが、今後、中高生向けの対応についての研修の充実もお願いしたい。

・青い鳥号（移動図書館）の取組は、地域に図書館がない子どもたちや保護者にとって大変有意義であり、継続してほしい。

・現在の公共図書館は、施設に魅力がないように思う。まず、現代の子どもが足を向けたくなる施設を整備したうえで、そこに本との出会いを作っていけないか。

・公共図書館のサービス改善については、図書館としての目的など公益性とのバランスを考えながら、全館で一律の内容を進めるのではなく、地域のニーズに応じた図書館づくりをそれぞれの館で行うべきである。

・レファレンスサービスなど、図書館の本来の機能も大事に、今後の図書館づくりを行ってほしい。

・アンケート結果から、今の時代の図書館には、貸出型ではなく、滞在型（居場所としての）のニーズが高くなっていることがわかる。

・図書館が、友達と会ったり勉強したり、気軽に友達と集える場所になり、本に出会うきっかけが増えるとよい。

・家庭環境・社会経済的背景の違いによる読書経験の格差を埋めるために、学校に過重な負担を掛けないためにも、地域学校協働活動推進員を活用するなどして、地域の力を生かした取組が大切である。

- ・親も本を読んでいない状況で、例えば、親子にとって身近にある商店街と連携した取組（各店舗に関連した本を置くなど）が、親子で自然に本に触れるきっかけになるのではないか。

<学校等ができること、望まれること>

- ・日常の教育活動や子どもへの声掛けの中で、ちょっとした工夫や心掛けでできる取組を増やしていくことが大事である。
- ・子どもの読書活動の充実には、司書教諭や探究的な活動を担う先生の関わりも大切である。
- ・Teamsを活用した学校司書間の情報交流は、学校司書が孤立しないで活動ができ、良い取組である。
- ・幼稚園や保育所などの就学前施設での取組も大切である。
- ・図書室を活用した学校間交流があると、子どもたちが新鮮な気持ちで読書に向き合えるのではないか。
- ・開館時間と生活サイクルの兼合いで、公共図書館を活用しづらい中高生には、学校図書館の充実が大切である。
- ・子どもにとって一番身近に本に出合える場所である学校図書館の役割は重要であり、学校司書の配置や蔵書等の充実が大切である。
- ・自分が何に興味があるのかわからない大学生や新社会人が多い。小学生段階から自分自身を知る探究活動に取り組み、その興味関心に応じた本を学校図書館に置けば、自然と本を手取るのではないか。

（論点3）多様な子どもたちの読書機会の確保について

○背景

- ・特別な支援が必要な子どもや日本語指導を必要とする子どもが増えてきており、さらに特定分野に特異な才能のある子どもなどへの支援も指摘されている。
- ・多様な子どもたちに対応した取組を行うためには、それぞれの子どものための障壁を踏まえた、学校図書館と公共図書館との連携や取組を支える人材の育成・確保などが課題となると考えられる。

○議論のポイント

- ・地域（図書館等）ができること、望まれることについて
- ・学校ができること、望まれることについて

○主な意見

<地域（図書館等）や学校に望まれること>

- ・日本語指導を必要とする子どもへの取組に関して、外部機関や民間団体などとの連携を継続的に行うには、学校と専門機関をつなぐ人材が必要である。
- ・支援が必要な子どもたちの読書活動における課題への対応として、本のある場所への物理的なアクセス、内容や情報へのアクセスをいかに実現できるか。

- ・総合支援学校は、在籍児童・生徒の年齢が幅広く、また障害も様々であり、全ての子どもたちに合った本を学校図書館に所蔵することが難しいため、学校図書館を補完する仕組みが必要である。また、子どもが本を自ら選べないような場合もあり、読書活動を支える保護者等への周知も含めて、学校図書館の蔵書やICT機器等の有効な活用を支援する体制の充実も望まれる。

- ・デイジー図書や電子書籍が有効な場面もあるが、小学部段階で絵本に興味・関心がある子どもへの電子書籍に関しては、発達段階に応じて、読上げの速度や抑揚、視覚的提示方法などに工夫や配慮のあるコンテンツの充実が望まれる。

- ・支援が必要な子どもが、個性に応じて自分で本を選ぶ仕組みや子どものニーズを把握する仕組みがあると、個々の子どもへの継続的な読書支援はもとより、子どもの特性や発達段階に応じた選書の一助となる。

(論点4) デジタル環境の下での読書活動の推進について

○背景

- ・スマートフォンや電子書籍の普及、学校では、GIGAスクール構想のもと、1人1台端末の活用が進むなど、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化する中で、読書とICTの活用、学校図書館や公共図書館の在り方について検討が必要となっている。

○議論のポイント

- ・ICTの活用が進む中での、子どもたちの電子書籍の利用や学校図書館・公共図書館のDX（デジタルトランスフォーメーション）の在り方について

○主な意見

- ・読書の分野で、無理にDXを進める必要はないと思うが、DXも活用して子どもたちにとって読むことができる本の選択肢が拡げられているかという視点を大事にすべき。

- ・保存や維持管理、著作権などの問題で、電子書籍も万能ではない。目的に応じて、紙の本と電子書籍とを使い分けるとよい。

- ・書誌事項を調べるという点では、電子は有効で、現在導入しているカーリルの活用は継続してほしい。

- ・デジタルデバイスを使用するときの子どもの身体性への影響も考慮したガイドラインの作成など、注意点の周知啓発やその対策とセットで進めていくことが必要である。

- ・デジタルコンテンツの増加で余暇における読書の優先順位が下がる一方で、動画配信サービスなどでの本の紹介動画が読書の入口になることもある。

- ・論文の閲覧も今はweb上が主流。ネット掲示板が元になった小説もある。デジタル環境の下で、読書の世界は広がっている。

- ・図書館のSNSの運用を強化し、若者がSNSから蔵書検索へつながる動線を設計してはどうか。

- ・ノベライズ本など、他のメディアやデジタルコンテンツをきっかけとした読書のPRも有効である。

(論点5) 京都ならではの魅力に親しむ読書について

○背景

- ・これまでの読書計画の基本方針には、歴史や伝統文化など、京都の魅力に親しむ読書活動を掲げ、学校図書館への京都関連図書整備や、子どもが古典文学に親しむ機会の創出、京都市図書館において、京都の魅力や歴史、伝統文化等を子どもに伝える郷土コーナーの充実などを実施してきた。
- ・今後、子どもたちの主体的な読書活動につなげるため、新たな取組についての検討が必要となっている。

○議論のポイント

- ・京都ならではの魅力に親しむ読書活動において大切な視点について
- ・子どもたちの主体的な読書活動につなげるため、ここ京都でできることについて

○主な意見

- ・京都には小学生向けの郷土資料が少ない。また、郷土資料の蔵書には、伝統文化や古典だけでなく、偏りがないようにすべきである。
- ・子どもたちに京都らしさを伝えるときは、伝統文化、歴史の観点だけでなく、京都の先進性についても伝えていく必要がある。
- ・文学を切り口に、地域と結びつけて子どもたちが散策するという企画もいいのではないか。
- ・日本の本の歴史は、折り本・巻き物・扇に記されたものなど多様性に富んでいる。革や布にくるむと燃えにくくなるなど、当時の文化が反映されたもの。京都には、例えば江戸時代の本を簡単に手に取れる環境がある。手触りや紙をめくった音などを通じて、伝統的な本の機能・美しさ、京都の文化の多様性、本という乗り物に日本人の魂がどう乗せられて受け継がれてきたかを実感して欲しい。
- ・伝統芸能を演じるには想像力が必要であり、読書活動に通ずるところである。また、歴史上、文字を読めない人も多くいた中で、古典文学が現代まで受け継がれているのは、伝統芸能との関係性も深いところである。逆に、現代では、源氏物語や古今和歌集などの知識がないと能楽を楽しめない。子どもたちには伝統芸能との関わりも通じた読書体験を重ねて欲しい。

(論点6) 子どもの視点に立った読書活動の推進について

○背景

- ・子どもが主体的に読書活動を行えるよう、子どもの意見聴取の機会を確保し、取組に反映させることが求められる。

○議論のポイント

- ・令和7年度に実施した、児童・生徒の読書の実態を把握するためのアンケート結果から気になった項目、見えてきた課題、子どもたちの主体的な読書活動を進めるための方策等

について

○主な意見

- ・読書ボランティアが中心の活動へ、学校が意識的に関わることで、子どもが読書に触れるきっかけが増え、子どもの様子も変わる。
- ・学校が読書活動についてどのような方針を持っていて、その中で学校司書にはどのような役割を担ってほしいのか、学校司書と学校図書館の専門職である司書教諭との連携、学校の協力体制など、組織的な取組を確認していくことが大切である。
- ・公共図書館の今後の在り方については、固定概念から離れて考えていくことが求められているかもしれない。
- ・公共図書館、学校図書館は、蔵書数を増やすだけでなく、本との出会いのタッチポイントをどれくらい作れるかが大事である。
- ・各図書館のユニークポイントの打出しも必要である。
- ・アンケート結果を踏まえると、子どもの読書活動を促す前に、子どもが読みたい本を身近な環境に置くなどの環境整備が必要ではないか。
- ・子どもが見ている本の世界を広げる取組が必要である。
- ・アンケート結果にあった、現実逃避から本を読むきっかけとなる「読みたい気持ち」も、読書活動の推進にうまく活用できないか。
- ・大学の図書館などに所蔵されている、昔の貴重な本に触れる体験があると、本への興味や敬意を育むきっかけになる。
- ・動画などのメディアと読書の関係については、短絡的に相反するものと捉えず、もう少し検討する必要がある。
- ・アンケート結果を有効に活用し、施策に反映するための取組を進めて欲しい。
- ・子どもの視点に立った読書活動を検討する際は、特別な支援が必要な子どもや日本語を母語としない子どもなどをはじめ、多様な子どもの状況や意見を把握するための調査方法や体制を引き続き検討する必要がある。
- ・友達同士や親子での読書を介した日常的なコミュニケーションも大切である。
- ・子どもたち同士で本を薦め合うビブリオバトルや、読書感想文の在り方を見直して読書体験文にするなど、子どもたちが読書の楽しさを共感し合える取組の工夫が必要である。

3 意見まとめ

(1) 読書活動の意義と発信については

①読書活動の意義

現代の子どもたちは多様な情報手段に囲まれているが、読書はその中でも、子どもの「想像力」や「考える力」を自然に育み、脳の働きを活性化させることで心の発達を支える重要な活動である。また、他者の考えや多様な価値観に触れ、理解することで、困難に直面した際の支えにもなり得る。読書は、子どもの豊かな人間性を育むためにも欠かせない営みであり、読書環境の整備は子どもの基本的な権利として全ての子どもに保障されるべきである。

②効果的な発信

読書の意義を伝えるには、上記の読書活動の意義について改めて示すとともに、保護者や学校に対しては、負担感なく取り組める方法や、発達段階に応じた読書の効果を具体的に示すことで、読書の価値を実感できるような発信が求められる。また、大人自身の読書体験を自らの言葉で語ったり、読書している姿を見せたりすることは、子どもに自然な形で読書の価値を伝えられる有効な方法である。さらには、大人の読書離れも進む中、子どもたちに親和性が高く、子どもたちに直接に訴えかける、デジタルコンテンツを活用した発信の充実も有効である。

(2) 家庭・地域・学校等の役割については

①家庭や子どもたちにとって望ましい啓発活動

読書への関心を高めるには、子ども自身の興味や発達段階に応じた柔軟な働きかけが必要である。家庭では、読書が子育ての助けになることや、親子の会話のきっかけになることを伝えるなど、家庭に寄り添い、価値を実感できる啓発が求められる。また、読書のきっかけは多様であり、子どもの興味や特性に応じて、本の感触や身近な人とのつながりなど、子どもに響く柔軟なアプローチを検討していく必要がある。

②地域（図書館等）ができること、望まれること

地域の図書館等は、子どもが本に出合う場として重要な役割を担っており、レファレンスサービスなどの基本機能の充実や移動図書館の実施が引き続き求められる。また、ブックトークの推進や子どもの本コンシェルジュによる専門的支援など、発達段階に応じた読書活動推進を支える人材の研修の充実も効果的である。画一的でない、地域のニーズに応じ、自然と足を向けたくなるような柔軟な図書館づくりを進めることが、子どもたちの読書活動をより豊かにする図書館サービスの充実にとって大切である。

また、家庭環境や社会経済的背景の違い、障害の有無等による読書経験の格差を埋めるためには、学校だけでなく、地域と学校の協働の仕組みを活用するなど、地域ぐるみの取組も有効である。

③学校や就学前施設等ができること、望まれること

学校は、子どもの読書活動を支える重要な場であり、子どもが日常的に本と触れ合える環境づくりを行うことが望ましい。また、学校司書の配置や蔵書の整備など学校図書館の充実とともに、司書教諭や探究的な学びを担う教員の積極的な関わりも大切である。ICTを活用した学校司書同士の情報共有は、学校での読書活動の支援体制の充実につながる取組である。さらに、就学前施設での取組や、小学校などでの図書室を活用した学校間交流、公共図書館を利用する時間的余裕が少ない中高生が本に出合う機会を確保するための学校図書館の充実など、発達段階に応じた取組も重要である。

(3) 多様な子どもたちの読書機会の確保については

多様な子どもたちが読書の機会を得るためには、読書における障壁を取り除く視点をもって、本のある場所への物理的なアクセスや内容・情報へのアクセスをいかに実現できるかが重要である。音声読上げ対応の電子書籍やデジタイズ図書などの活用も有効だが、引き続き、年齢や興味に応じた工夫のあるコンテンツの充実が求められる。また、学校図書館と公共図書館の連携や、学校と専門機関とをつなぐ人材の育成・確保も望まれる。子どもの個性に応じた選書や読書履歴を蓄積し、広く活用する仕組み、学校等での子どもの特性に応じた柔軟な読書活動の支援につながる。

(4) デジタル環境の下での読書活動の推進については

ICTの活用が進む中、デジタル環境の進展と読書活動の推進が相反するものとは短絡的に捉えず、電子書籍の活用やSNS・動画配信サービスを通じた本との出会いも含めて、子どもたちの選択肢を広げられているかという視点が大切であり、SNSを活用した図書館情報の発信の充実やデジタルコンテンツをきっかけとした読書機会の創出も有効である。一方で、電子書籍は、保存や維持管理、著作権、身体への影響などの課題もあり、紙の本と、目的に応じた使い分けが求められる。たとえば書誌情報検索などに積極的にデジタルを活用しつつ、関係機関等が作成する資料など※を参考に、子どもたちの健康・安全面や発達段階等にも配慮しながら、紙媒体や電子媒体等を柔軟に選択できるようにすることが大切である。

※「児童生徒の健康に留意してICTを活用するためのガイドブック」（文部科学省）

「子供の目の健康を守るための啓発資料」（文部科学省）

「令和7年度教育の情報化に向けた取組の推進について（通知）」（京都市教育委員会）

(5) 京都ならではの魅力に親しむ読書については

「京都ならではの」を捉える際には、伝統文化や歴史、古典文学だけでなく、琵琶湖疏水に象徴される京都が取り入れてきた先進性にも光を当てることが重要である。学校図書館や公共図書館において、子ども向けの郷土資料の充実や分野の偏りが無いように、多様なテーマの資料を取り扱うことで、子どもの興味・関心を広げることができる。

また、京都の子どもたちが、町歩きや文学作品の舞台探訪、伝統的な和本との触れ合いや古典文学を題材とした伝統芸能鑑賞など、京都ならではの実体験と結びつけた

読書機会を創出することが、主体的な読書活動への効果的な取組となる。

(6) 子どもの視点に立った読書活動の推進については

①子どもと本との出会いを広げること

子どもが主体的に読書に取り組むためには、子どもたちが読みたい本がある環境づくりが大切である。特に公共図書館や学校図書館の蔵書の充実に加え、学校図書館では、選書会など、子ども自身が本を選ぶ機会を設けることも有効である。

さらには、友達同士や親子での読書を介した日常的なコミュニケーションや子どもたち同士で本を薦め合うビブリオバトル、読書感想文の在り方の見直しなど、子どもたちが読書の楽しさを共感し合える取組の工夫が必要である。

また、「これ以上読む本がない」「本は読み尽くした」というアンケートでの子どもの意見からは、子どもが見ている本の世界を広げる工夫が必要であることがわかる。そして、本を読むきっかけとなる子どもたちの「読みたい気持ち」を読書活動の取組にうまく活用していくことも有効である。

②魅力ある学校図書館や公共図書館づくりをすること

公共図書館や学校図書館には、アンケート調査の結果からわかった子どもと保護者の意識や思い等を踏まえ、蔵書数の充実や従来の図書館としての機能だけでなく、例えば、子どもが「居心地がよい」「知的好奇心をくすぐられる」などと感じる空間デザインなどの図書館づくりが求められる。とりわけ公共図書館では、各館の特色を打ち出し、施設の魅力を高め、静かな空間やにぎやかな交流スペースなど多様な選択肢を提供することで、子どもが自然と図書館に足を運びたくなる環境を整えることも大切である。

(7) 取り組むべき基本方針

以上、(1)から(6)の内容を踏まえ、今後、京都市の子どもの読書活動の推進のために取り組むべき基本方針は、次のとおりと考える。

- ①全ての子どもへ読書に親しむ機会の提供
- ②子どもの発達段階・発達特性や社会の変化に応じた読書環境の充実
- ③子どもの読書活動を支える大人への啓発・理解促進
- ④京都ならではの魅力に親しむ読書活動の充実
- ⑤生涯にわたる学びにつながる読書習慣の定着

(参考資料) 京都市の子どもの読書活動の現状

(1) 第4次京都市子ども読書活動推進計画(平成31年4月～令和8年3月)の取組状況

学校において、朝読書や「読書ノート」を活用した「めざせ100冊!読書マラソン運動」が推進され、学校図書館と連携した授業づくりや取組の充実が進められている。また、学校司書の配置拡大が進み、令和元年度には必要な全ての小・中・小中・総合支援学校への週2日配置を達成。令和6年度からは、一部の大規模校等(10校)で週3日配置が実現している。さらに、読み聞かせボランティアやPTAなどのご協力により、学校図書館の開館時間も拡大している。

京都市図書館では、中高生の利用を増やすため、ティーンズコーナーの設置やSNSでの発信、中学生対象のビブリオバトル大会、市立高校生と連携したイベントなどが実施され、中高生が様々な形で本や読書に触れる機会を作る取組が継続されてきた。

なお、第4次計画の取組の方向性と進捗状況を把握するために設けた数値目標について、現状は以下のとおりである。これらの結果を踏まえ、引き続き、読書活動の推進に向けた取組の充実が期待される。

取組内容	数値目標	現状(令和7年度)
小学生・中学生の不読率 (1ヶ月に1冊も本を読まない子の割合)	・小学生 2%以下 ・中学生 8%以下	・小学生 6.5% ・中学生 23.3%
学校以外で本を「読まない」高校生の割合	50%以下	60.0%
京都市図書館の年間の学校及び地域団体貸出冊数	50,000冊	29,465冊(令和6年度)
・7～12歳の京都市図書館利用登録率 ・13～18歳の京都市図書館利用登録率	・7～12歳 60% ・13～18歳 55%	・7～12歳 49.8%(令和6年度) ・13～18歳 39.8%(令和6年度)
12学級未満の小学校への司書教諭配置 ※12学級以上の学校については全校配置完了	100%	60.0%

(2) 令和7年度 児童・生徒の読書の実態を把握するためのアンケート調査について

ア 概要

教育委員会事務局において、第4次京都市子ども読書活動推進計画の取組成果を検証し、新たに策定する「京都市子どもの読書活動推進のための取組指針」に活用するため、児童・生徒・保護者を対象に、子どもたちの読書の実態を把握するためのアンケート調査が実施された。

イ 対象

市立小（小中）学校（50校）の児童（4～6年生）とその保護者
市立中（小中）学校（24校）の生徒（1（7）～3（9）年生）とその保護者
市立高等学校（9校）の生徒（1～3年生）

ウ 実施期間

令和7年5月12日～28日

エ 回答者の属性

【小（小中）学校】

学年	人数	割合
4年	485人	35.7%
5年	452人	33.2%
6年	423人	31.1%
計	1,360人	100%

【中（小中）学校】

学年	人数	割合
1（7）年	254人	38.6%
2（8）年	220人	33.4%
3（9）年	184人	28.0%
計	658人	100%

【高等学校】

学年	人数	割合
1年	416人	34.2%
2年	438人	36.0%
3年	363人	29.8%
計	1,217人	100%

【保護者】

年代	人数	割合
20歳代	1人	0.2%
30歳代	100人	16.2%
40歳代	421人	68.1%
50歳代	90人	14.6%
60歳代	3人	0.5%
それ以外	3人	0.5%
計	618人	100%

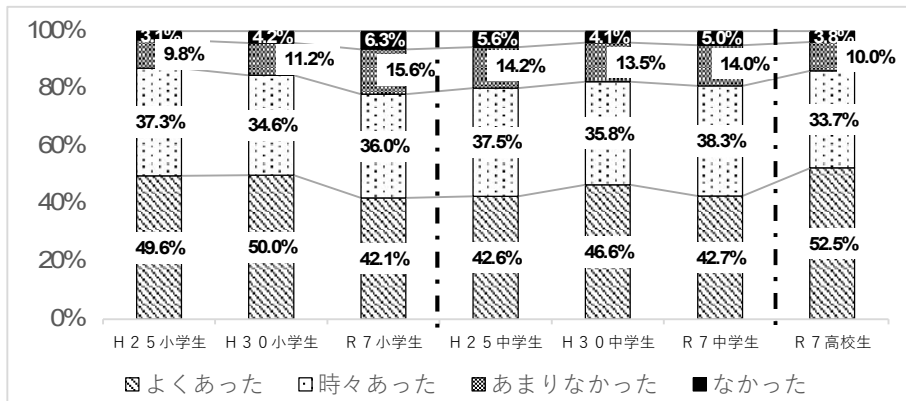
※本調査において、「本」とは、紙の本以外に、パソコンやタブレット、スマートフォンなどで読める本「電子書籍」も含み、マンガや雑誌、攻略本、新聞、教科書や参考書は含まない。

才 結果

○児童・生徒

①小さい頃（保育園・幼稚園～小学3年生位まで）、家の人（保護者等）に本を読んでもらったことがあったか

R7 年度	よくあった	時々あった	あまりなかった	なかった
小学生	42.1%	36.0%	15.6%	6.3%
中学生	42.7%	38.3%	14.0%	5.0%
高校生	52.5%	33.7%	10.0%	3.8%

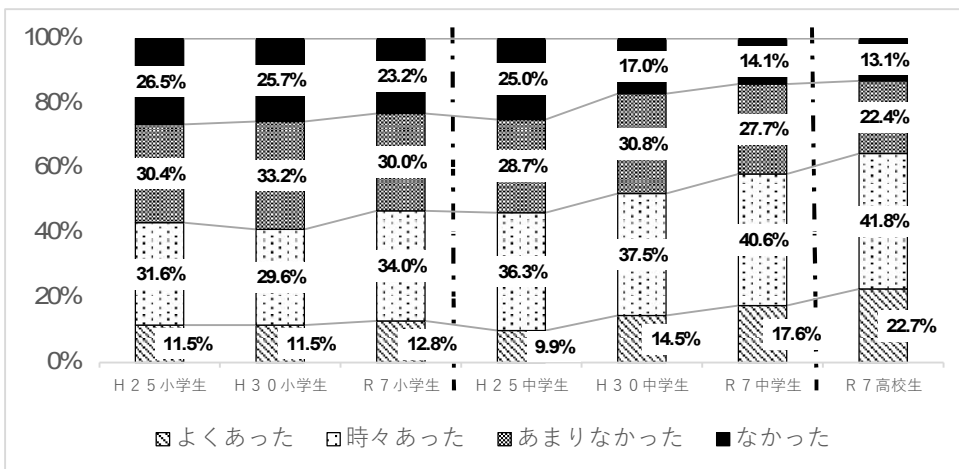


○校種が下がるほど、読んでもらったことがある子どもの割合が減少

○前回調査との比較では、小・中ともに、読んでもらったことがある子どもの割合が減少

②小さい頃（保育園・幼稚園～小学3年生位まで）、家の人（保護者等）や先生以外の、図書ボランティアや地域の方などに本を読んでもらったことがあったか

R7 年度	よくあった	時々あった	あまりなかった	なかった
小学生	12.8%	34.0%	30.0%	23.2%
中学生	17.6%	40.6%	27.7%	14.1%
高校生	22.7%	41.8%	22.4%	13.1%

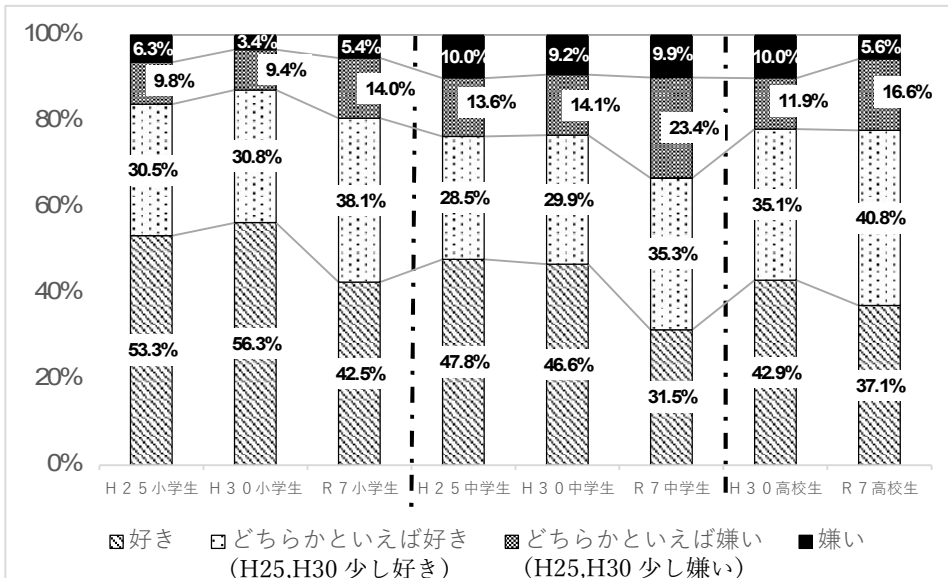


○校種が下がるほど、読んでもらったことがある子どもの割合が減少

○前回調査との比較では、小・中ともに、読んでもらったことがある子どもの割合が増加

③本を読むことが好きか

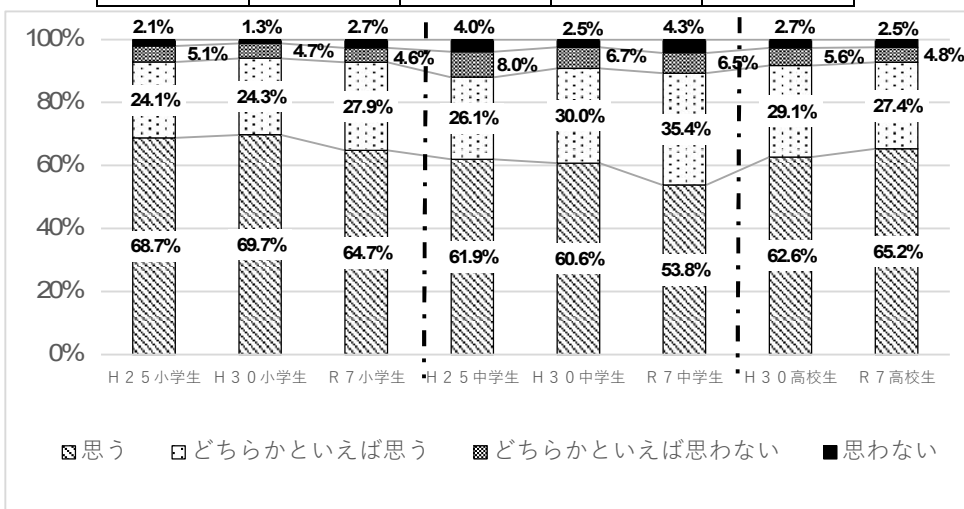
R7年度	好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
小学生	42.5%	38.1%	14.0%	5.4%
中学生	31.5%	35.3%	23.4%	9.9%
高校生	37.1%	40.8%	16.6%	5.6%



○読書が「好き」、「どちらかといえば好き」な子どもの割合は、中が6割以上、小・高が8割程度
 ○前回調査との比較では、小・中・高ともに、読書が好きな子どもの割合が減少

④本を読むことは大切だと思うか

R7年度	思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない
小学生	64.7%	27.9%	4.6%	2.7%
中学生	53.8%	35.4%	6.5%	4.3%
高校生	65.2%	27.4%	4.8%	2.5%



○読書が大切だと「思う」「どちらかといえば思う」と子どもの割合は9割程度
 ○前回調査との比較では、小・中で読書が大切だと思う子どもの割合が減少、高で増加

⑤本を読むことが大切だと思う理由 <高校生>

(回答者：本を読むことは大切だと思う、どちらかと言えば思う生徒)

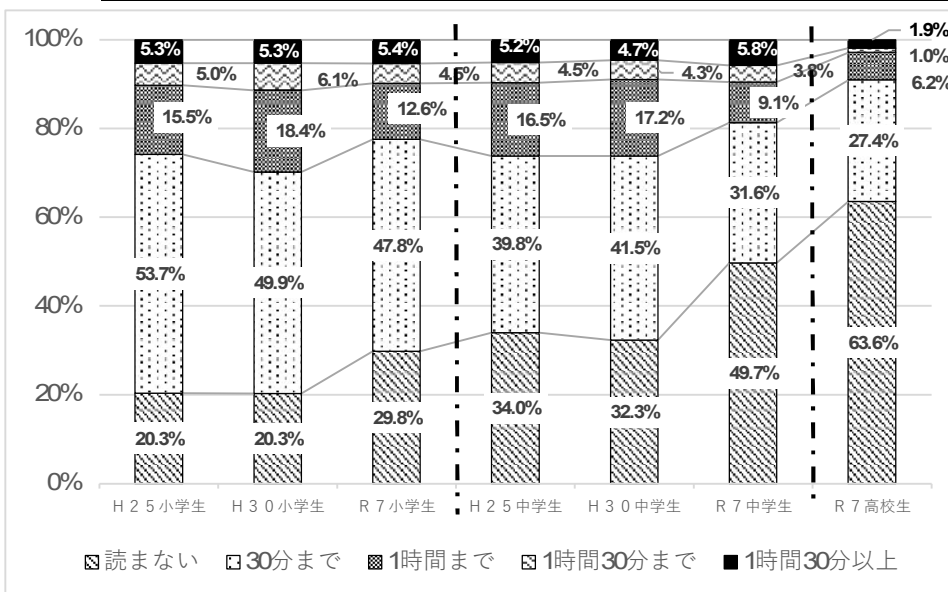
R7 年度		
高校生	語彙が増える	51.3%
	教養や知識が身につく	39.9%
	想像力が豊かになる	32.8%
	読解力が向上する	25.5%
	表現力が向上する	17.7%
	視野が広がる	15.5%
	ストレス解消になる	7.8%
	なんとなくそう思う	2.5%
	その他	1.2%

※複数（2つまで）回答可のため、合計しても 100%にならない

- 「語彙が増える」、「教養や知識が身につく」、「想像力が豊かになる」と回答した生徒の割合が高い
- 「その他」の意見には、「心の支えになる」、「人生が豊かになる」などの意見があった

⑥学校へ行く日（月～金）<（小中のみ）学校以外で>、平均して1日にどれくらいの時間、本を読むか

R7 年度	読まない	30分まで	1時間まで	1時間30分まで	1時間30分以上
小学生	29.8%	47.8%	12.6%	4.5%	5.4%
中学生	49.7%	31.6%	9.1%	3.8%	5.8%
高校生	63.6%	27.4%	6.2%	1.0%	1.9%

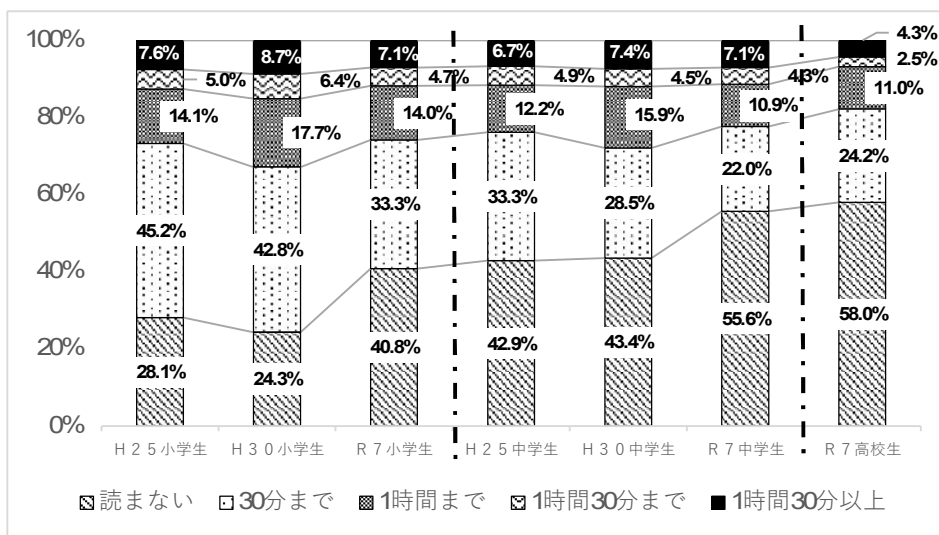


○校種が上がるほど、本を読まない子どもの割合が増加

○前回調査との比較では、小・中ともに、本を読まない子どもの割合が増加

⑦学校へ行かない日（土日や祝日）、平均して1日にどれくらいの時間、本を読むか

R7年度	読まない	30分まで	1時間まで	1時間30分まで	1時間30分以上
小学生	40.8%	33.3%	14.0%	4.7%	7.1%
中学生	55.6%	22.0%	10.9%	4.3%	7.1%
高校生	58.0%	24.2%	11.0%	2.5%	4.3%



○校種が上がるほど、本を読まない子どもの割合が増加

○前回調査との比較では、小・中ともに、本を読まない子どもの割合が増加

⑧学校へ行く日<（小中のみ）学校以外で>、行かない日、ともに、本を読まない児童・生徒の割合

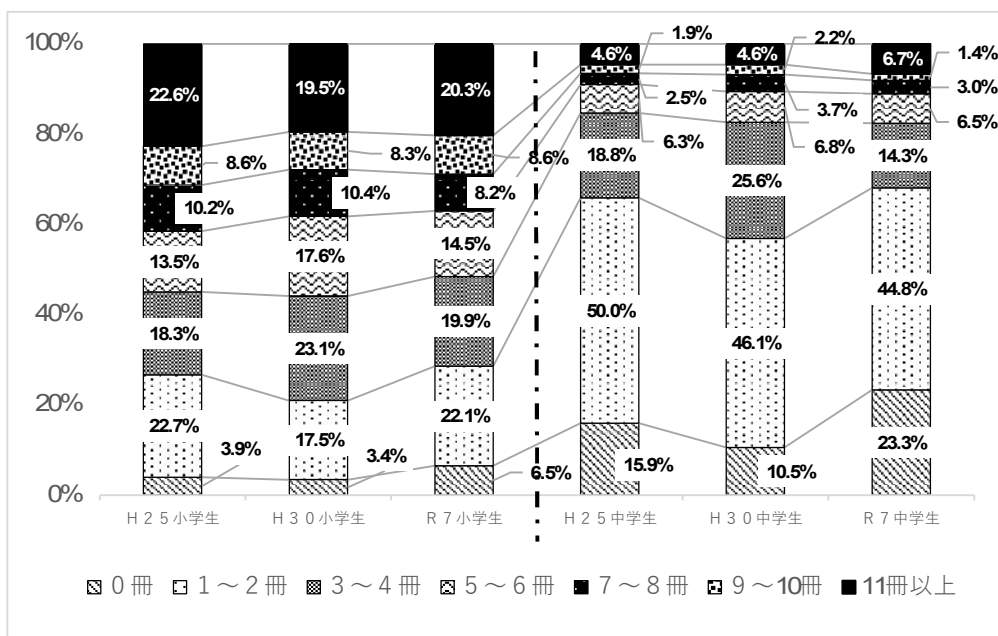
R7年度	
小学生	24.2%
中学生	43.9%
高校生	54.0%

※「学校へ行く日<（小中のみ）学校以外で>/行かない日、1日にどれくらいの時間読書をするか」という質問に対して、どちらも「読まない」と回答した児童・生徒の割合

○校種が上がるほど、本を読まない子どもの割合が増加

◎1ヶ月にどれくらいの本を読むか <小・中学生>

R7年度	0冊	1～2冊	3～4冊	5～6冊	7～8冊	9～10冊	11冊以上
小学生	6.5%	22.1%	19.9%	14.5%	8.2%	8.6%	20.3%
中学生	23.3%	44.8%	14.3%	6.5%	3.0%	1.4%	6.7%

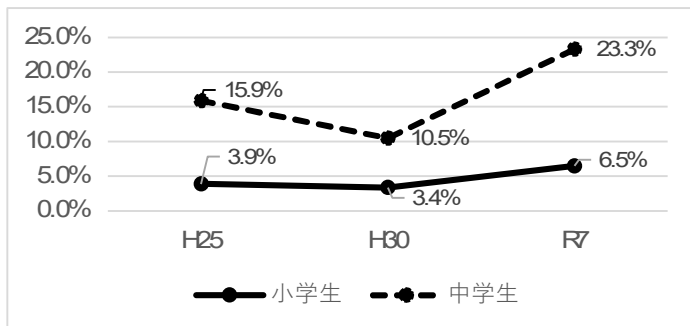


○小より中のほうが、読書冊数が少ない子どもの割合が高く、読書冊数が多い子どもの割合が低い
○前回調査との比較では、小・中ともに「0冊」「11冊以上」が増加し、二極化の傾向がみられる

⑩不読率（1ヶ月に1冊も本を読まない児童・生徒の割合） <小・中学生>

R7年度	
小学生	6.5%
中学生	23.3%

※全国学校図書館協議会「学校読書調査」（令和6年度）の不読率：小学生 8.5%、中学生 23.4%



○小・中ともに令和6年度の「学校読書調査（全国学校図書館協議会）」の不読率とほぼ同じ結果となった
○前回調査との比較では、小・中ともに、不読率が増加

⑪学校以外で本を読まない児童・生徒の割合

R7 年度	
小学生	24.2%
中学生	43.9%
高校生	60.0%

○校種が上がるほど、学校以外で本を読まない子どもの割合が増加

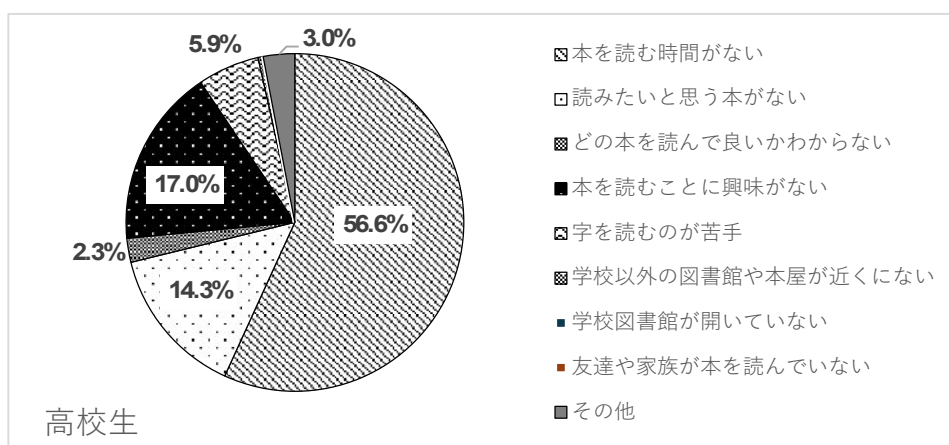
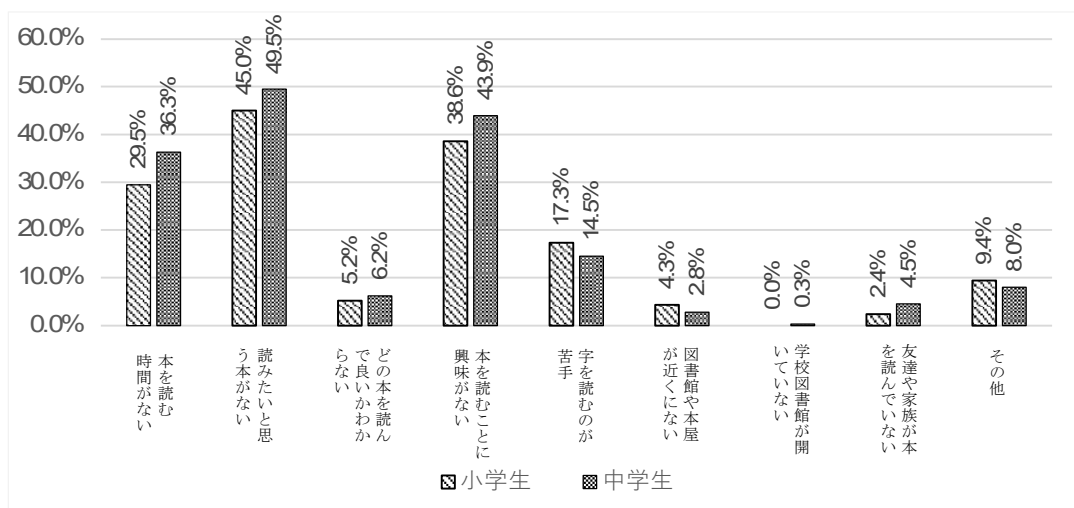
○小・中において、不読率の結果と比較すると、学校が読書機会を保障していることがわかる

⑫本を読まない主な理由

(回答者：⑥及び⑦で「本を読まない」と回答した児童・生徒)

R7 年度	小学生	中学生	高校生
本を読む時間がない	29.5%	36.3%	56.6%
読みたいと思う本がない	45.0%	49.5%	14.3%
どの本を読んで良いかわからない	5.2%	6.2%	2.3%
本を読むことに興味がない	38.6%	43.9%	17.0%
字を読むのが苦手	17.3%	14.5%	5.9%
学校以外の図書館や本屋が近くにない	4.3%	2.8%	0.5%
学校図書館が開いていない	0.0%	0.3%	0.0%
友達や家族が本を読んでいない	2.4%	4.5%	0.0%
その他	9.4%	8.0%	3.0%

※小・中は複数（2つまで）回答可のため、合計しても100%にならない



○小・中では（複数回答可）、「読みたいと思う本がない」、「本を読むことに興味がない」と回答した児童・生徒の割合が、他の項目と比較して高い

○高では、半数以上の生徒が「本を読む時間がない」と回答している。

○「その他」の意見には、「他のことを優先している」、「読書が苦手・負担に感じる」、「手元に本がない」などの意見があった

⑬勉強や部活動などの時間以外で自分が「自由に使える時間」に、何をしているか
 <高校生> （回答者：⑫で「本を読む時間がない」と回答した生徒）

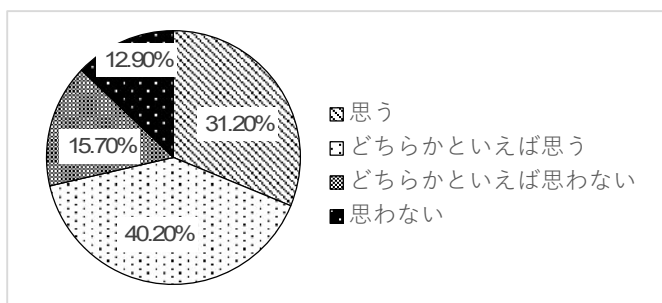
R7 年度		
高校生	テレビやユーチューブなどの動画を見る	42.7%
	SNSで、投稿やメッセージ交換をする	37.4%
	友達と遊ぶ	33.1%
	音楽を聴く	23.7%
	テレビゲームをする	16.9%
	習い事やボランティア活動	6.2%
	マンガ・雑誌などを読む	5.6%
	家の手伝いをする	1.3%
	本を読む	0.5%
	地域行事に参加する	0.0%
	自由に使える時間がない	6.5%
	その他	7.8%

※複数（2つまで）回答可のため、合計しても 100%にならない

- 「テレビやユーチューブなどの動画を見る」、「SNSで、投稿やメッセージ交換をする」、「友達と遊ぶ」と回答した生徒の割合が高い
- 「その他」の意見には、「スポーツ」や「音楽の演奏」など、趣味の時間として使っているという意見が多かった

⑭今後、本を読む量を増やしたいと思うか <高校生>
 （回答者：⑥及び⑦で「本を読まない」と回答した生徒）

R7 年度	思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない
高校生	31.2%	40.2%	15.7%	12.9%



○今後、「本を読む量を増やしたいと思う」、「どちらかといえば思う」と回答した生徒が、7割以上

⑮読む本をどのように選んでいるか <高校生>
 (回答者：⑥又は⑦で「本を読む」と回答した生徒)

R7 年度		
高校生	本屋で気になった本	52.0%
	自分の好きなジャンルや作家の本	43.9%
	ドラマ・映画・アニメ・漫画などの原作や関連の本	16.1%
	インターネットやSNSで話題になった本	15.7%
	友達や家族のおすすめの本	14.5%
	家にある本	12.1%
	学校図書館や学校以外の図書館で気になった本	8.0%
	ベストセラーの本	7.5%
	勉強や探究学習などに関連した本	7.3%
	学校の先生や学校図書館の先生のおすすめの本	1.8%
	その他	3.2%

※複数（2つまで）回答可のため、合計しても100%にならない

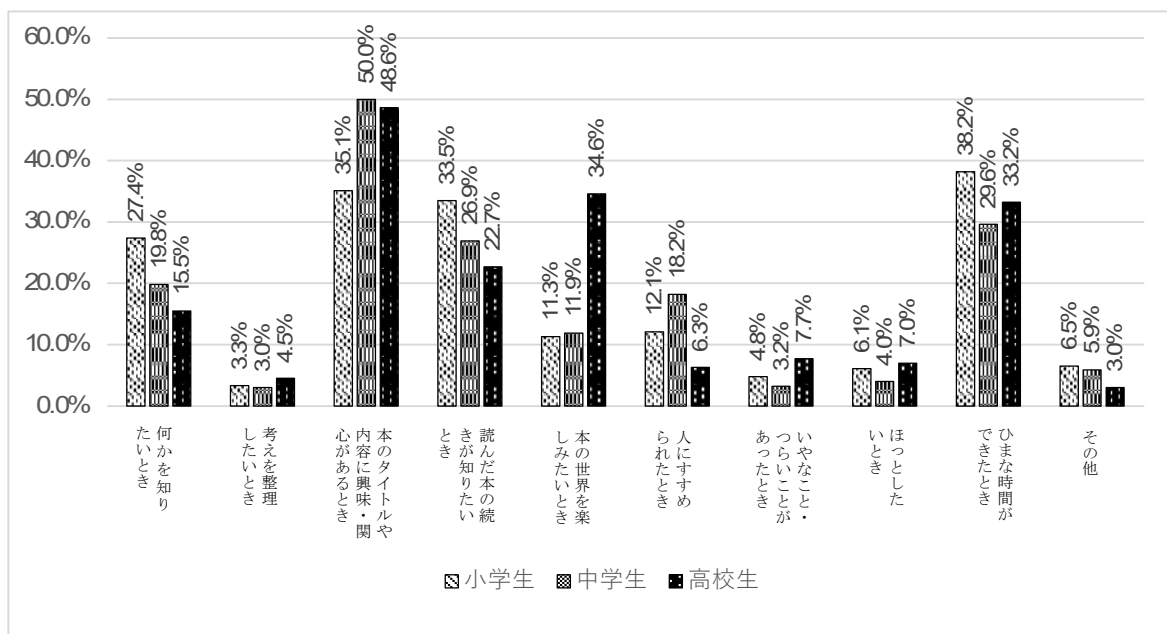
- 「本屋で気になった本」や「自分の好きなジャンルや作家の本」と回答した生徒の割合が高い
- 次に、「異なるメディアの原作や関連本」や「SNS等で話題になった本」、「身近な人のおすすめの本」と回答した生徒の割合が高かった
- 「学校図書館や学校以外の図書館で気になった本」「学校の先生や学校図書館の先生のおすすめの本」の割合は低かった
- 「その他」の意見には、「表装（本の表紙、カバー）が気に入った本」という意見があった

⑩本を読みたいと思うのはどのようなときか <高校生>

(回答者：⑥又は⑦で「本を読む」と回答した生徒)

R7 年度	小学生	中学生	高校生
何かを知りたいとき	27.4%	19.8%	15.5%
考えを整理したいとき	3.3%	3.0%	4.5%
本のタイトルや内容に興味・関心があるとき	35.1%	50.0%	48.6%
読んだ本の続きを知りたいとき	33.5%	26.9%	22.7%
本の世界を楽しみたいとき	11.3%	11.9%	34.6%
人にすすめられたとき	12.1%	18.2%	6.3%
いやなこと・つらいことがあったとき	4.8%	3.2%	7.7%
ほっとしたいとき	6.1%	4.0%	7.0%
ひまな時間ができたとき	38.2%	29.6%	33.2%
その他	6.5%	5.9%	3.0%

※複数（2つまで）回答可のため、合計しても100%にならない

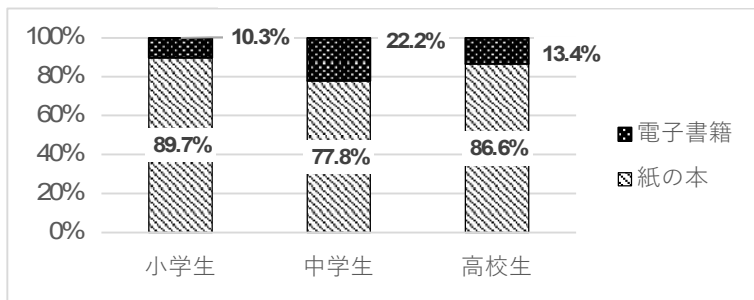


○校種ごとで特徴があった回答は、小では「何かを知りたいとき」、中では、「人にすすめられたとき」、高では「本の世界を楽しみたいとき」が他の校種の結果と比較して、割合が高い
○「その他」の意見には、「眠れないとき、寝る前」、「落ち着きたいとき」、「勉強したくないとき」などの意見があった

⑰紙の本と電子書籍の本のどちらの本をよく読むか

R7年度	紙の本	電子書籍
小学生	89.7%	10.3%
中学生	77.8%	22.2%
高校生	86.6%	13.4%

※紙の本または電子書籍を読むと回答した児童・生徒数を母数とした割合

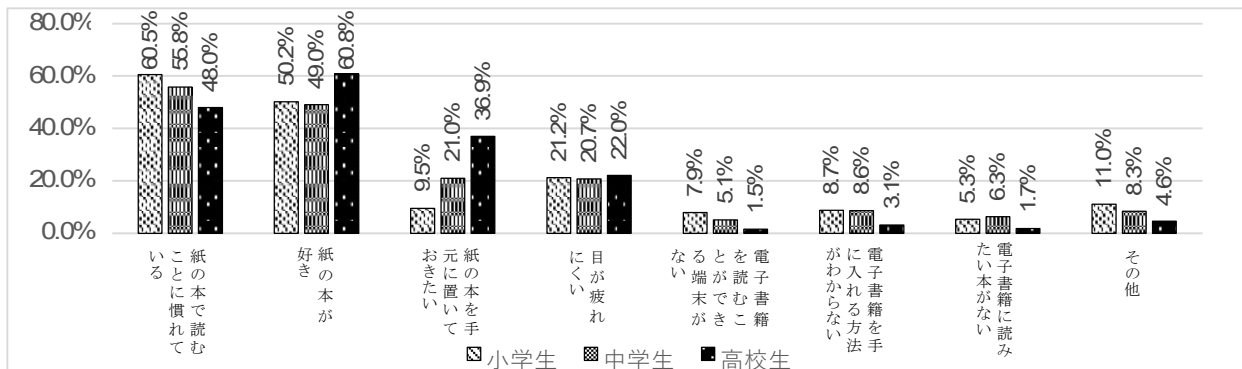


- どの校種でも、紙の本を読む児童・生徒の割合が非常に高い
- 中では、小・高と比較して、電子書籍を読む生徒の割合が高い

⑱紙の本をよく読む主な理由

R7年度	小学生	中学生	高校生
紙の本で読むことに慣れている	60.5%	55.8%	48.0%
紙の本が好き	50.2%	49.0%	60.8%
紙の本を手元に置いておきたい	9.5%	21.0%	36.9%
目が疲れにくい	21.2%	20.7%	22.0%
電子書籍を読むことができる端末がない	7.9%	5.1%	1.5%
電子書籍を手に入れる方法がわからない	8.7%	8.6%	3.1%
電子書籍に読みたい本がない	5.3%	6.3%	1.7%
その他	11.0%	8.3%	4.6%

※複数（2つまで）回答可のため、合計しても100%にならない

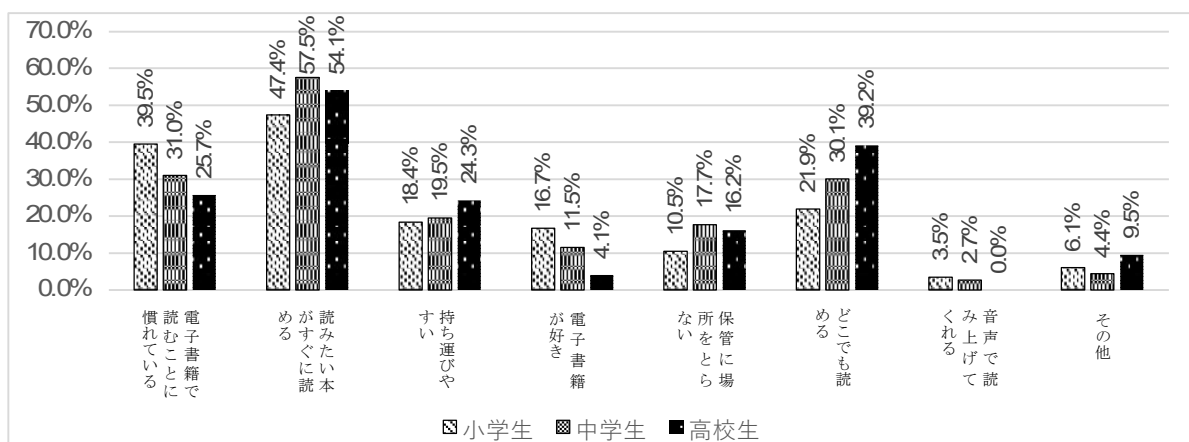


- どの校種でも、「紙の本で読むことに慣れている」、「紙の本が好き」と回答した児童・生徒の割合が高い
- 校種が上がるほど、「紙の本を手元に置いておきたい」と回答する児童・生徒の割合が増加
- 「その他」の意見には、紙の本の方が「没入感がある」、「より深く内容が頭に入る」、「読み切った感がある」、「読みたいページを探しやすい」、「友達と共有しやすい」などの意見があった。

⑩電子書籍をよく読む主な理由

R7年度	小学生	中学生	高校生
電子書籍で読むことに慣れている	39.5%	31.0%	25.7%
読みたい本がすぐに読める	47.4%	57.5%	54.1%
持ち運びやすい	18.4%	19.5%	24.3%
電子書籍が好き	16.7%	11.5%	4.1%
保管に場所をとらない	10.5%	17.7%	16.2%
どこでも読める	21.9%	30.1%	39.2%
音声で読み上げてくれる	3.5%	2.7%	0.0%
その他	6.1%	4.4%	9.5%

※複数（2つまで）回答可のため、合計しても100%にならない

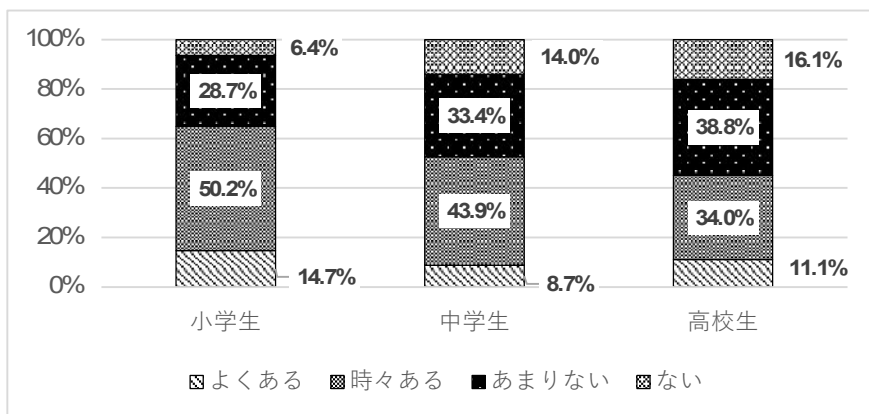


○どの校種でも、「慣れている」、「読みたい本がすぐに読める」、「どこでも読める」と回答した児童・生徒の割合が高い

○「その他」の意見には、「色々なジャンルの本に出合える」、「本をおすすめしてくれるサービスがある」などの意見があった

⑳探究学習（調べ学習）で本を読んだり、本で調べたりすることがあるか

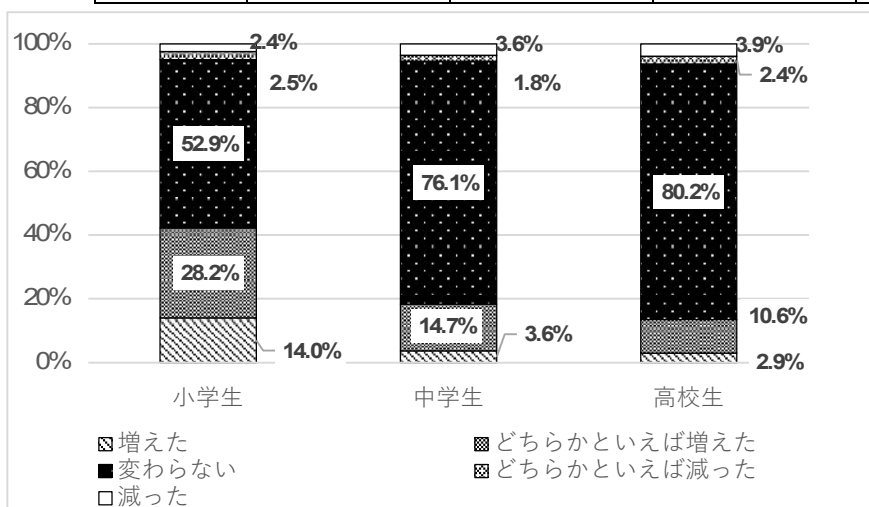
R7 年度	よくある	時々ある	あまりない	ない
小学生	14.7%	50.2%	28.7%	6.4%
中学生	8.7%	43.9%	33.4%	14.0%
高校生	11.1%	34.0%	38.8%	16.1%



○小学校で7割、中・高で5割程度の児童生徒が探究学習（調べ学習）で本を活用
 ○校種が上がるほど、探究学習（調べ学習）で多様な情報収集手段が求められ、本を活用する割合が低下

㉑学校の探究学習（調べ学習）をきっかけに、本を読む量が変わったか

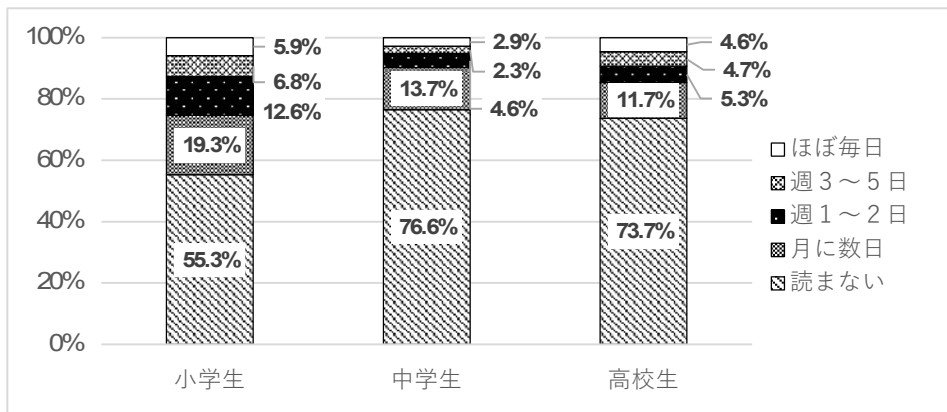
R7 年度	増えた	どちらかといえば増えた	変わらない	どちらかといえば減った	減った
小学生	14.0%	28.2%	52.9%	2.5%	2.4%
中学生	3.6%	14.7%	76.1%	1.8%	3.6%
高校生	2.9%	10.6%	80.2%	2.4%	3.9%



○小では、「増えた」、「どちらかといえば増えた」と回答した児童の割合が約42%で、探究学習（調べ学習）が、小学生段階では読書活動を進めるきっかけとなっていることがわかる
 ○一方で、中・高では、「変わらない」と回答した生徒の割合が8割程度

⑳ 普段、新聞（電子版を含む）をどれくらい読むか

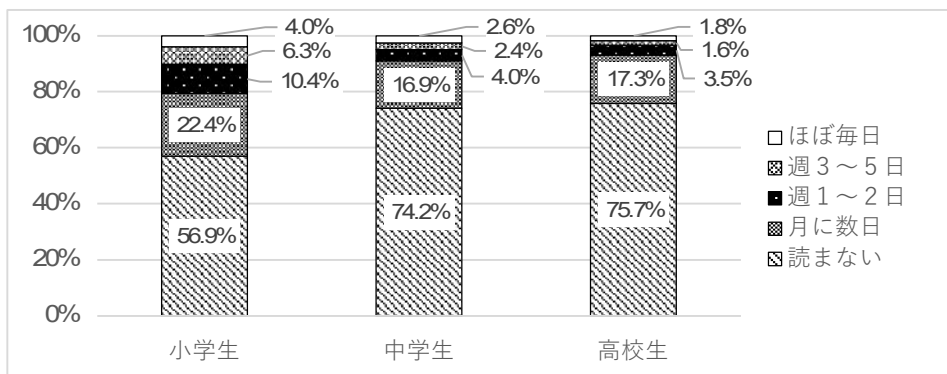
R7 年度	ほぼ毎日	週3～5日	週1～2日	月に数日	読まない
小学生	5.9%	6.8%	12.6%	19.3%	55.3%
中学生	2.9%	2.3%	4.6%	13.7%	76.6%
高校生	4.6%	4.7%	5.3%	11.7%	73.7%



○小では、「読まない」と回答した児童の割合が5割を超え、中・高では、「読まない」と回答した生徒の割合が7割を超えている

㉑ 普段、雑誌（電子版を含む）をどれくらい読むか

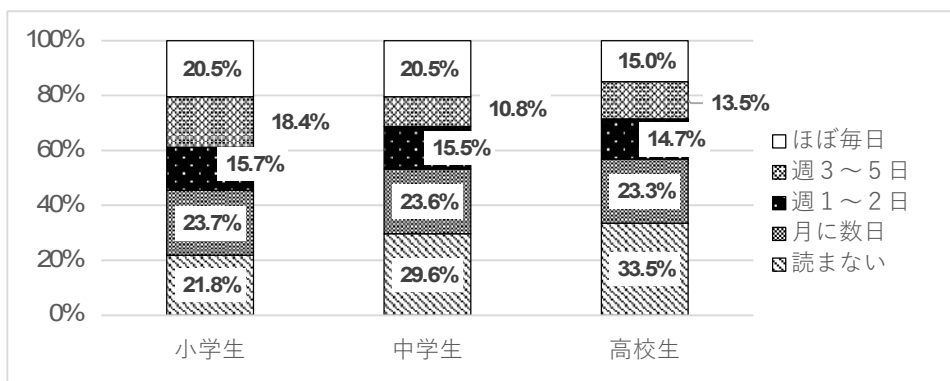
R7 年度	ほぼ毎日	週3～5日	週1～2日	月に数日	読まない
小学生	4.0%	6.3%	10.4%	22.4%	56.9%
中学生	2.6%	2.4%	4.0%	16.9%	74.2%
高校生	1.8%	1.6%	3.5%	17.3%	75.7%



○小では、「読まない」と回答した児童の割合が5割を超え、中・高では、「読まない」と回答した生徒の割合が7割を超えている

②④ 普段、マンガ（電子版を含む）をどれくらい読むか

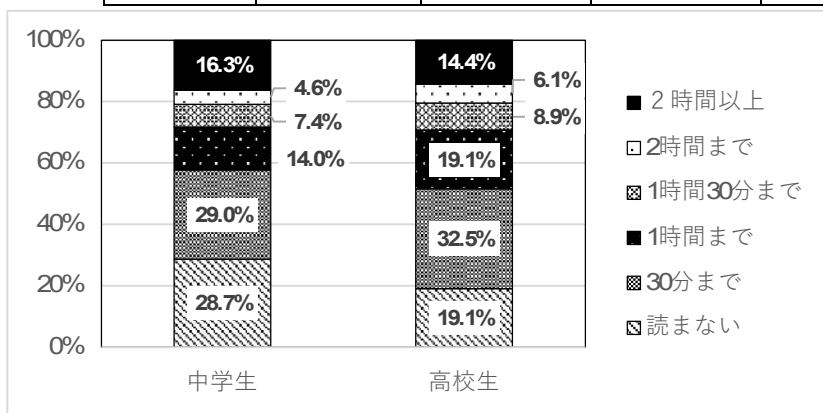
R7 年度	ほぼ毎日	週3～5日	週1～2日	月に数日	読まない
小学生	20.5%	18.4%	15.7%	23.7%	21.8%
中学生	20.5%	10.8%	15.5%	23.6%	29.6%
高校生	15.0%	13.5%	14.7%	23.3%	33.5%



- 「週に1日以上読む」児童・生徒が4～5割程度いる一方で、「読まない」児童・生徒も2～3割程度いる
- 校種が上がるほど、マンガを読まない児童・生徒の割合が増加

②⑤ 情報機器で文字・活字による情報を平均して1日にどれくらい読むか（ただし電子書籍や新聞、雑誌、マンガは除く。） <中学・高校生>

R7 年度	読まない	30分まで	1時間まで	1時間30分まで	2時間まで	2時間以上
中学生	28.7%	29.0%	14.0%	7.4%	4.6%	16.3%
高校生	19.1%	32.5%	19.1%	8.9%	6.1%	14.4%

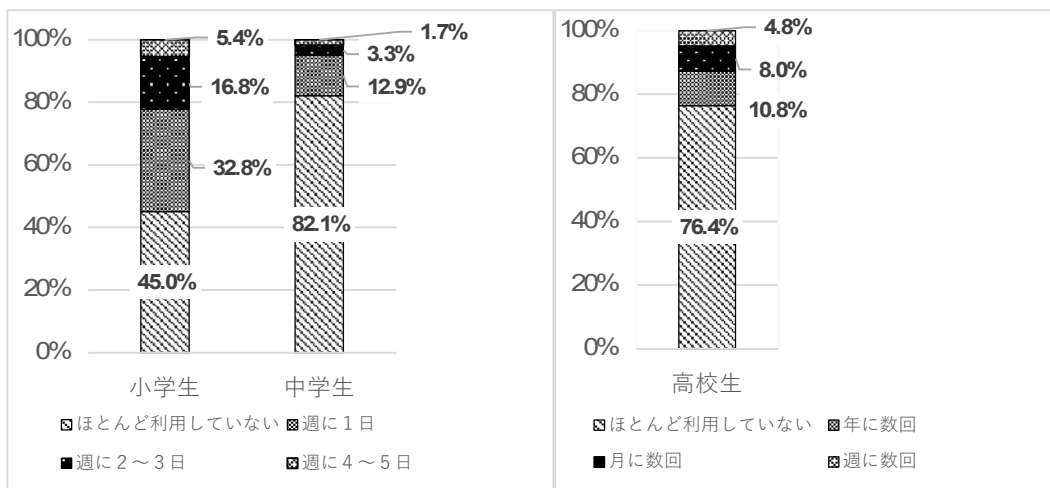


- 「情報機器で文字・活字による情報」を「読まない」と回答した生徒は2割から3割程度
- 一方で、「2時間以上」と回答した生徒は15%程度

②6 授業以外で、学校の図書館を、どれくらい利用しているか

R7 年度	週に4～5日	週に2～3日	週に1日	ほとんど利用していない
小学生	5.4%	16.8%	32.8%	45.0%
中学生	1.7%	3.3%	12.9%	82.1%

R7 年度	週に数回	月に数回	年に数回	ほとんど利用していない
高校生	4.8%	8.0%	10.8%	76.4%



○「ほとんど利用していない」児童は、小では45%、中・高では80%程度

②7 授業以外で、学校の図書館をどのような目的で利用しているか <高校生>

R7 年度		
高校生	本を借りるため	43.9%
	本を読むため	43.9%
	勉強するため	39.4%
	学習の調べものをするため	26.1%
	友達と過ごすため	9.4%
	1人になるため	9.1%
	その他	3.5%

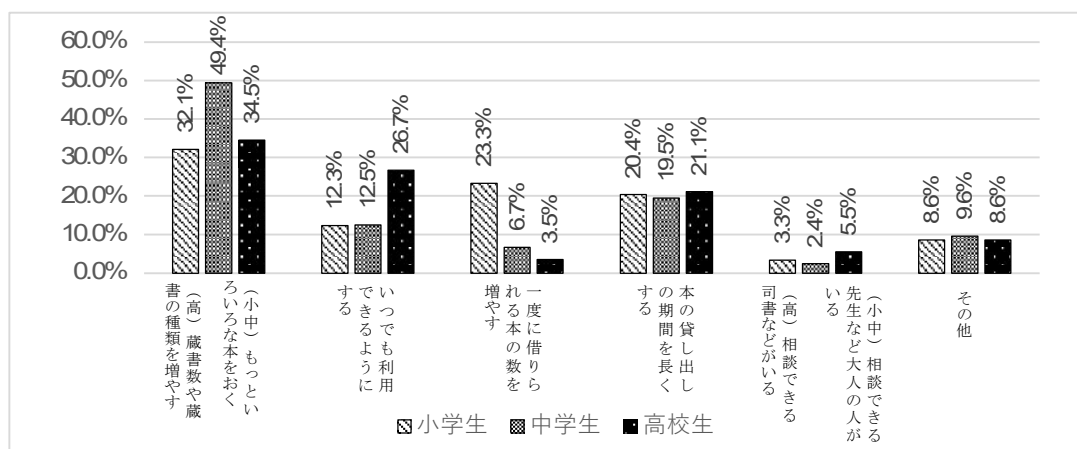
※複数（2つまで）回答可のため、合計しても100%にならない

○「本を借りたり」、「本を読んだり」、「勉強したり」するために利用すると回答した生徒の割合が高い

○「その他」の意見には、「気分が落ち着く」など、学校図書館を居場所としてとらえている意見があった

⑳学校の図書館に最も望むことは何か

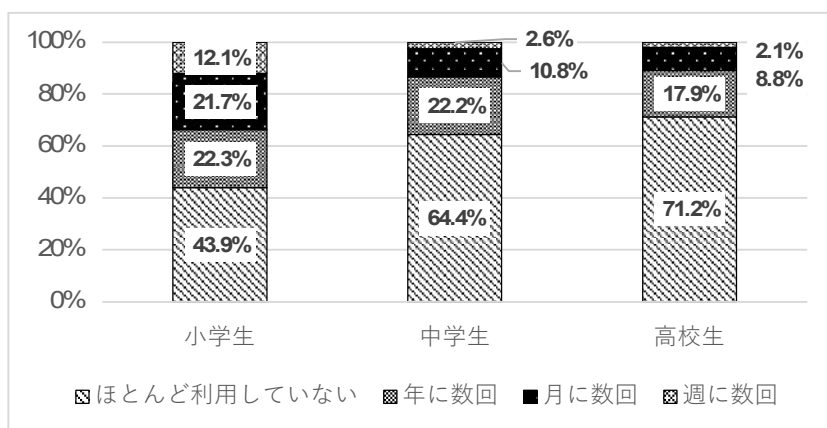
R7年度	小学生	中学生	高校生
(小・中) もっといろいろな本をおく (高) 蔵書数や蔵書の種類を増やす	32.1%	49.4%	34.5%
いつでも利用できるようにする	12.3%	12.5%	26.7%
一度に借りられる本を増やす	23.3%	6.7%	3.5%
本の貸し出しの期間を長くする	20.4%	19.5%	21.1%
(小・中) 相談できる先生など大人の人がいる (高) 相談できるや司書などがある	3.3%	2.4%	5.5%
その他	8.6%	9.6%	8.6%



- 小・中・高ともに「もっといろいろな本をおく」と回答した割合が最も高かったが、特に中では5割程度と高い
- 小では「一度に借りられる本を増やす」と回答した割合が他の校種と比べて高い
- 高では「いつでも利用できるようにする」と回答した割合が他の校種と比べて高い
- 「その他」の意見には、「落ち着いた空間」や「1人で、友達と一緒に、など利用用途によって使い分けられる空間」づくりなど、利用環境の改善についての意見や、勉強できる場所の確保についての意見があった

⑳学校以外の図書館（公共の図書館・移動図書館、児童館、子ども文庫など）を利用しているか

R7年度	週に数回	月に数回	年に数回	ほとんど利用していない
小学生	12.1%	21.7%	22.3%	43.9%
中学生	2.6%	10.8%	22.2%	64.4%
高校生	2.1%	8.8%	17.9%	71.2%



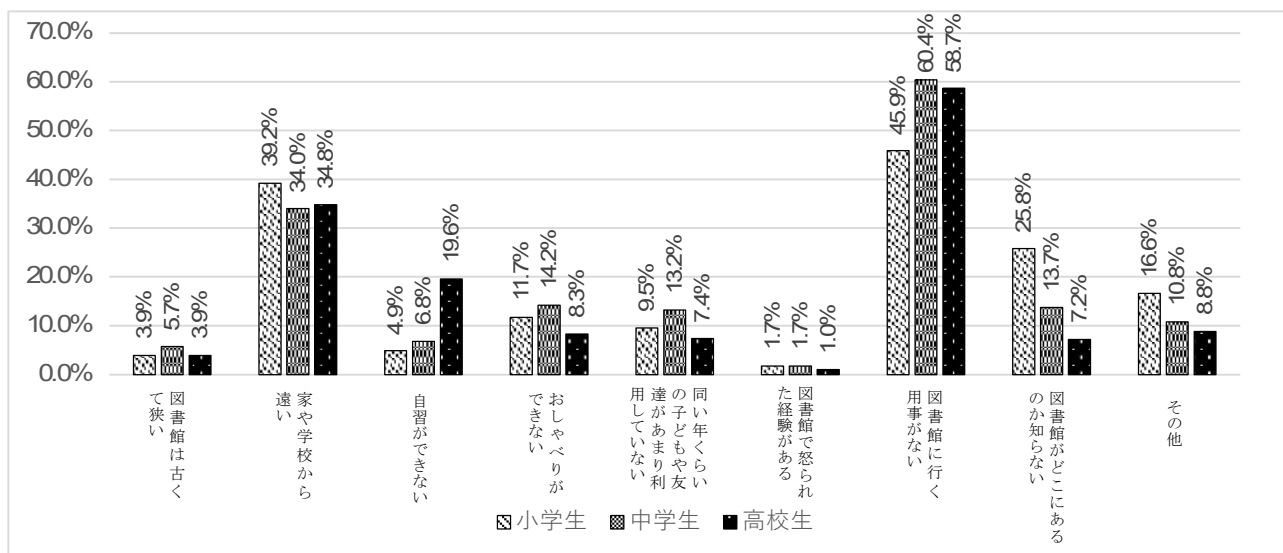
○小・中・高ともに、「ほとんど利用していない」と回答した児童・生徒の割合が最も高く、校種が上がるほど増加

③⑩公共の図書館を利用しない主な理由

(回答者：②⑨でほとんど利用しないと回答した児童・生徒)

R7年度	小学生	中学生	高校生
図書館は古くて狭い	3.9%	5.7%	3.9%
家や学校から遠い	39.2%	34.0%	34.8%
自習ができない	4.9%	6.8%	19.6%
おしゃべりができない	11.7%	14.2%	8.3%
同じ年くらいの子どもや友達があまり利用していない	9.5%	13.2%	7.4%
図書館で怒られた経験がある	1.7%	1.7%	1.0%
図書館に行く用事がない	45.9%	60.4%	58.7%
図書館がどこにあるのか知らない	25.8%	13.7%	7.2%
その他	16.6%	10.8%	8.8%

※複数（2つまで）回答可のため、合計しても100%にならない



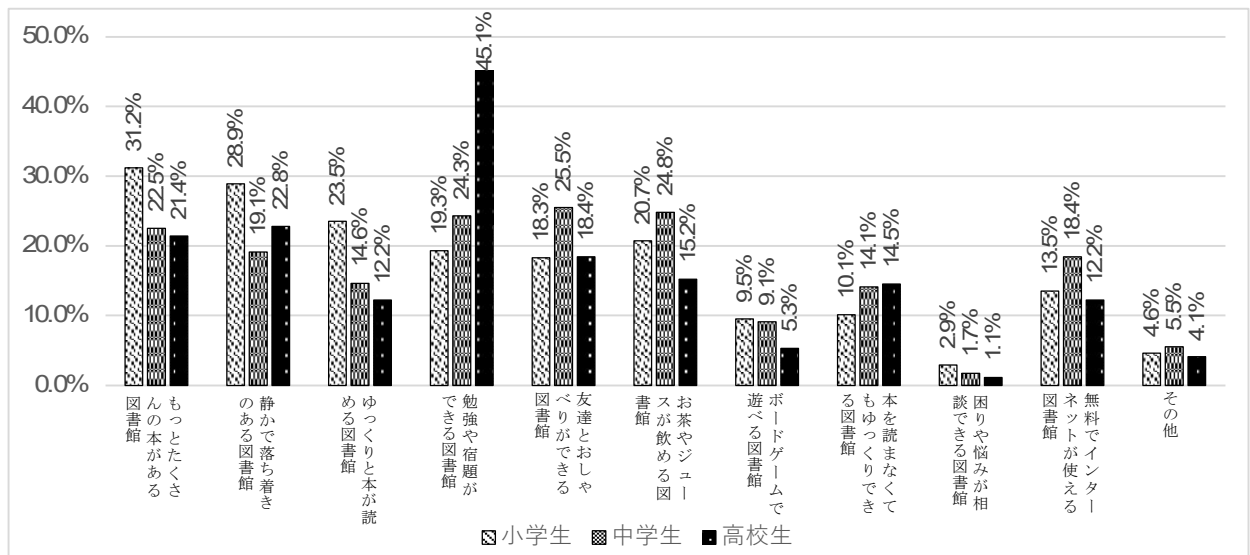
○小・中・高ともに、「図書館に行く用事がない」、「家や学校から遠い」と回答した児童・生徒の割合が最も高い

○「その他」の意見では、「行く時間がない」、「興味がない」、「馴染みがなく行きづらい」などの意見があった

③1 ①どんな公共の図書館なら利用したいと思うか

R7年度	小学生	中学生	高校生
もっとたくさん本がある図書館	31.2%	22.5%	21.4%
静かで落ち着きのある図書館	28.9%	19.1%	22.8%
ゆっくりと本が読める図書館	23.5%	14.6%	12.2%
勉強や宿題ができる図書館	19.3%	24.3%	45.1%
友達とおしゃべりができる図書館	18.3%	25.5%	18.4%
お茶やジュースが飲める図書館	20.7%	24.8%	15.2%
ボードゲームで遊べる図書館	9.5%	9.1%	5.3%
本を読まなくてもゆっくりできる図書館	10.1%	14.1%	14.5%
困りや悩みが相談できる図書館	2.9%	1.7%	1.1%
無料でインターネットが使える図書館	13.5%	18.4%	12.2%
その他	4.6%	5.5%	4.1%

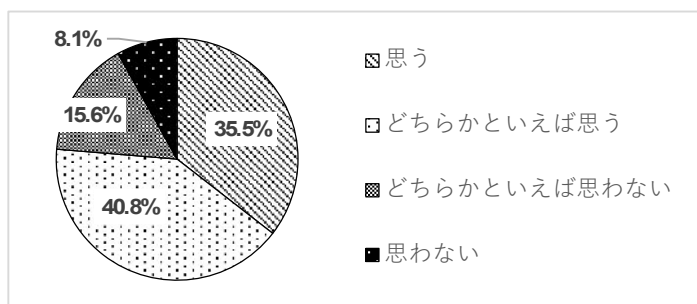
※複数（2つまで）回答可のため、合計しても100%にならない



- 小・中では、「もっとたくさん本がある図書館」や、「静かで落ち着きのある図書館」といった従来の図書館のイメージを求める回答の割合が高い
- 高では、「勉強や宿題ができる図書館」と回答した生徒の割合が最も高かった
- 「その他」の意見では、「家から近い」、「落ち着いて座ることができる空間」や「友達と話せる空間」がある図書館などの意見があった

③②現在の読書量にかかわらず、将来必要なときに、読書をするための能力や姿勢が身に付けられていると思うか <高校生>

R7年度	思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない
高校生	35.5%	40.8%	15.6%	8.1%



○全体的に読書量が減少する高校生であるが、8割近い生徒が読書をするための能力や姿勢が身に付いていると回答

③学校が終わってから（月～金）、どんなことをしていますか <小中学生>

R7年度	小学生	中学生
外で遊ぶ	49.3%	25.5%
テレビやユーチューブなどの動画を見る	46.5%	46.5%
テレビゲームをする	35.1%	33.4%
SNSで、投稿やメッセージ交換をする	4.8%	29.3%
音楽を聴く	12.7%	25.2%
本を読む	14.7%	6.5%
マンガ・雑誌などを読む	9.9%	8.8%
勉強をする	36.0%	22.9%
家の手伝いをする	6.8%	5.3%
塾や習い事	36.5%	28.1%
クラブや部活動	3.8%	40.3%
地域行事に参加する	0.1%	0.0%
お家の人と一緒に出かける	6.0%	1.8%
その他	6.0%	3.5%

※複数（3つまで）回答可のため、合計しても100%にならない

（小学生）

	R7		H30		H25	
1位	外で遊ぶ	49.3%	勉強をする	49.1%	外で遊ぶ	52.0%
2位	テレビやユーチューブなどの動画を見る	46.5%	塾や習い事	43.7%	塾や習い事	43.3%
3位	塾や習い事	36.5%	外で遊ぶ	43.4%	勉強をする	39.8%
4位	勉強をする	36.0%	テレビゲームをする	40.5%	テレビやDVD等を見る	32.9%
5位	テレビゲームをする	35.1%	テレビやDVD等を見る	27.5%	テレビゲームをする	32.3%
6位	本を読む	14.7%	クラブや部活動	18.6%	クラブや部活動	26.2%
本を読む	6位	14.7%	7位	15.9%	8位	14.6%

（中学生）

	R7		H30		H25	
1位	テレビやユーチューブなどの動画を見る	46.5%	クラブや部活動	52.8%	クラブや部活動	66.5%
2位	クラブや部活動	40.3%	携帯電話・スマートフォンを使う	44.2%	テレビやDVD等を見る	39.8%
3位	テレビゲームをする	33.4%	塾や習い事	39.4%	塾や習い事	36.0%
4位	SNSで、投稿やメッセージ交換をする	29.3%	テレビゲームをする	38.3%	携帯電話を使う	27.5%
5位	塾や習い事	28.1%	音楽を聴く	24.6%	音楽を聴く	23.0%
6位	外で遊ぶ	25.5%	テレビやDVD等を見る	23.8%	テレビゲームをする	21.9%
本を読む	10位	6.5%	10位	7.0%	11位	7.4%

③4 学校へ行かない日（土・日・祝日など）、どんなことをしているか <小中学生>

R7年度	小学生	中学生
外で遊ぶ	40.4%	29.9%
テレビやYouTubeなどの動画を見る	45.8%	50.5%
テレビゲームをする	39.5%	36.9%
SNSで、投稿やメッセージ交換をする	4.5%	26.4%
音楽を聴く	13.7%	22.2%
本を読む	16.1%	7.8%
マンガ・雑誌などを読む	8.5%	8.8%
勉強をする	24.6%	22.2%
家の手伝いをする	9.1%	4.1%
塾や習い事	25.7%	12.8%
クラブや部活動	2.8%	35.0%
地域行事に参加する	0.7%	0.0%
お家の人と一緒に出かける	29.7%	15.3%
その他	6.0%	3.8%

※複数（3つまで）回答可のため、合計しても100%にならない

（小学生）

	R7		H30		H25	
1位	テレビやYouTubeなどの動画を見る	45.8%	テレビゲームをする	46.3%	お家の人と一緒に出掛ける	41.9%
2位	外で遊ぶ	40.4%	お家の人と一緒に出掛ける	40.0%	外で遊ぶ	41.3%
3位	テレビゲームをする	39.5%	外で遊ぶ	38.2%	テレビやDVD等を見る	39.8%
4位	お家の人と一緒に出かける	29.7%	テレビやDVD等を見る	33.5%	テレビゲームをする	36.5%
5位	塾や習い事	25.7%	勉強をする	30.2%	勉強をする	28.5%
6位	勉強をする	24.6%	塾や習い事	28.4%	塾や習い事	24.7%
本を読む	7位	16.1%	7位	17.4%	8位	14.3%

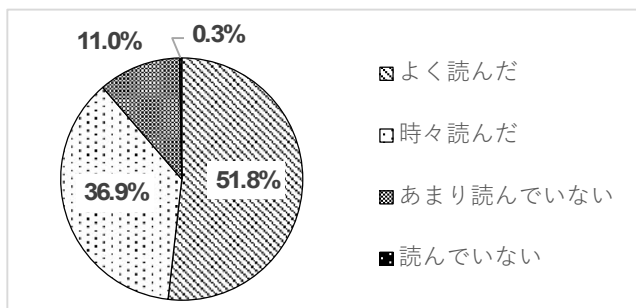
（中学生）

	R7		H30		H25	
1位	テレビやYouTubeなどの動画を見る	50.5%	クラブや部活動	48.6%	クラブや部活動	60.6%
2位	テレビゲームをする	36.9%	携帯電話・スマートフォンを使う	40.9%	テレビやDVD等を見る	40.6%
3位	クラブや部活動	35.0%	テレビゲームをする	37.8%	外で遊ぶ	31.8%
4位	外で遊ぶ	29.9%	外で遊ぶ	29.1%	携帯電話を使う	25.8%
5位	SNSで、投稿やメッセージ交換をする	26.4%	テレビやDVD等を見る	25.1%	テレビゲームをする	23.6%
6位	音楽を聴く	22.2%	音楽を聴く	22.4%	音楽を聴く	19.4%
本を読む	11位	7.8%	11位	7.8%	12位	7.3%

○保護者

①子どもに本を読んであげた（読み聞かせの）経験はあるか

R7年度	よく読んだ	時々読んだ	あまり読んでいない	読んでいない
保護者	51.8%	36.9%	11.0%	0.3%



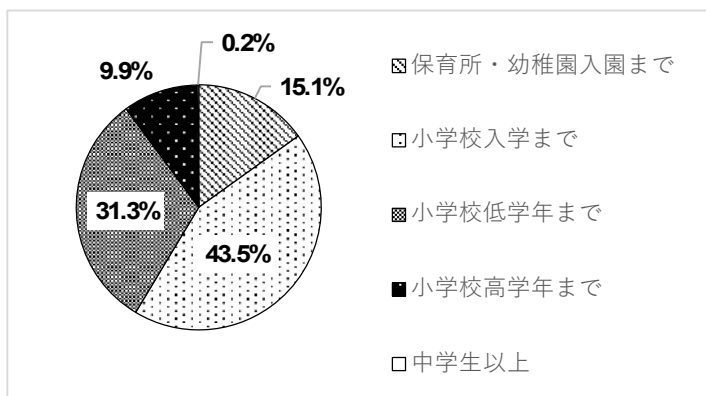
○「よく読んだ」、「時々読んだ」の割合は、9割弱

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	よく読んだ	時々読んだ	あまり読んでいない	読んでいない
H30年度	44.3%	41.9%	12.8%	0.8%
H25年度	44.5%	41.0%	13.2%	1.3%

②子どもに本を読んであげたのはいつ頃までか

R7年度	保育所・幼稚園入園まで	小学校入学まで	小学校低学年まで	小学校高学年まで	中学生以上
保護者	15.1%	43.5%	31.3%	9.9%	0.2%



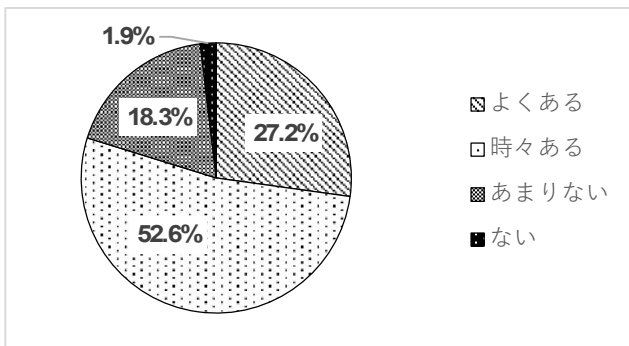
○「小学校入学まで」で子どもへの読み聞かせをやめている割合が6割弱

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	保育所・幼稚園入園まで	小学校入学まで	小学校低学年まで	小学校高学年まで	現在も続けている	していない
H30年度	23.3%	42.5%	25.9%	2.0%	4.8%	1.4%
H25年度	21.3%	45.9%	24.8%	1.7%	4.9%	1.5%

③本を話題にして子どもと話したことがあるか

R7年度	よくある	時々ある	あまりない	ない
保護者	27.2%	52.6%	18.3%	1.9%



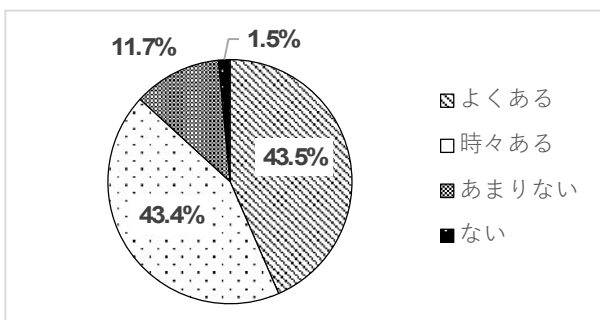
○「よくある」、「時々ある」の割合が8割程度

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	よくある	時々ある	あまりない	ない
H30年度	16.5%	49.2%	31.6%	2.7%
H25年度	17.7%	47.7%	31.0%	3.6%

④子どもに本を読むようにすすめたことがあるか

R7年度	よくある	時々ある	あまりない	ない
保護者	43.5%	43.4%	11.7%	1.5%



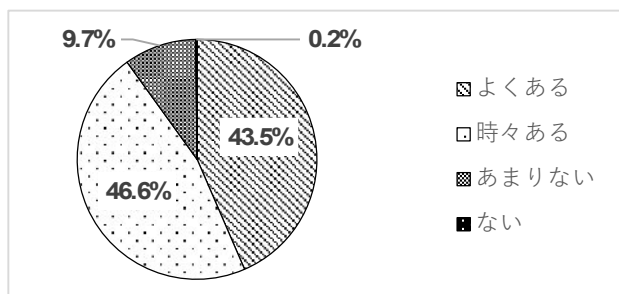
○「よくある」、「時々ある」の割合が9割弱

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	よくある	時々ある	あまりない	ない
H30年度	43.2%	43.0%	11.8%	1.8%
H25年度	44.9%	40.8%	12.2%	2.2%

⑤子どもと一緒に本屋へ行ったことがあるか

R7年度	よくある	時々ある	あまりない	ない
保護者	43.5%	46.6%	9.7%	0.2%



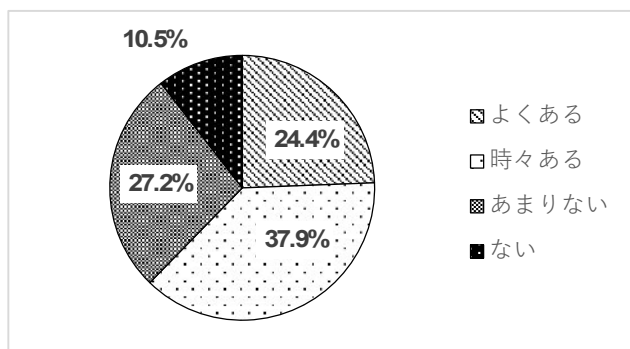
○「よくある」、「時々ある」の割合が9割程度

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	よくある	時々ある	あまりない	ない
H30年度	43.9%	47.2%	8.4%	0.4%
H25年度	45.6%	46.7%	7.1%	0.6%

⑥子どもと一緒に公共の図書館へ行ったことがあるか

R7年度	よくある	時々ある	あまりない	ない
保護者	24.4%	37.9%	27.2%	10.5%



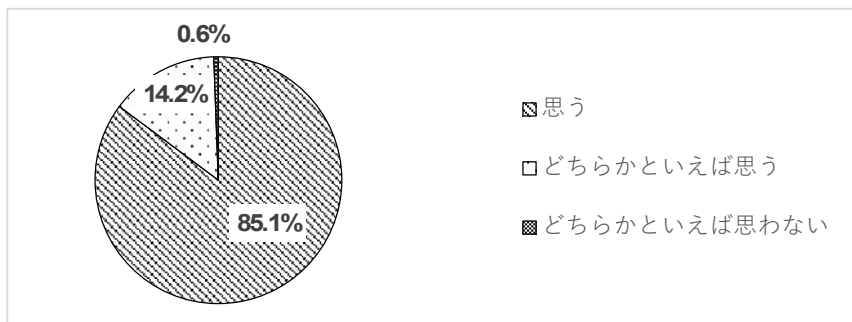
○「よくある」、「時々ある」の割合が6割強

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	よくある	時々ある	あまりない	ない
H30年度	17.0%	40.4%	29.6%	12.8%
H25年度	19.7%	40.7%	26.4%	13.1%

⑦子どもが本を読むことは大切だと思うか

R7年度	思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない
保護者	85.1%	14.2%	0.6%	0%



○「思う」、「どちらかといえば思う」の割合がほぼ100%

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	思う	少し思う	あまり思わない	思わない
H30年度	89.0%	10.3%	0.6%	0.0%
H25年度	92.1%	7.1%	0.5%	0.3%

⑧本を読むことが好きか

R7年度	好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
保護者	38.3%	38.7%	19.7%	3.2%



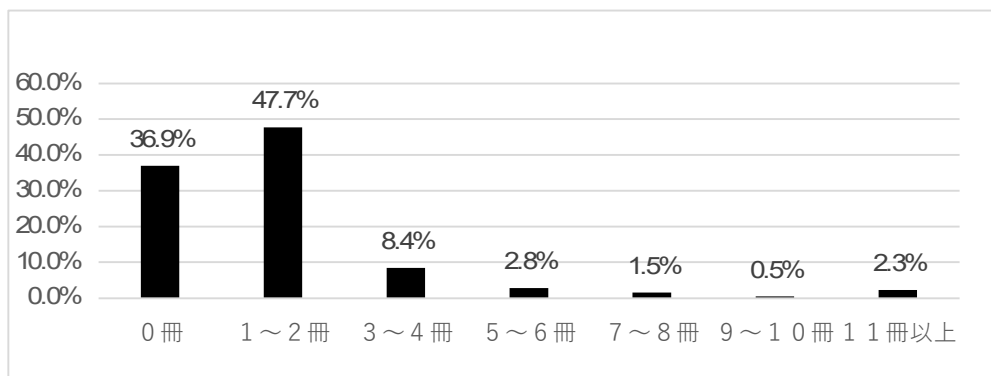
○「好き」、「どちらかといえば好き」の割合が8割弱

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	好き	少し好き	少し嫌い	嫌い
H30年度	40.7%	33.7%	18.2%	7.2%
H25年度	45.5%	33.7%	14.4%	6.3%

◎1ヶ月にどれくらいの本を読むか

R7年度	0冊	1～2冊	3～4冊	5～6冊	7～8冊	9～10冊	11冊以上
保護者	36.9%	47.7%	8.4%	2.8%	1.5%	0.5%	2.3%



○「0冊」の割合が4割弱

(参考) 令和5年度「国語に関する世論調査」(文化庁)では、1ヶ月に読む本の冊数が「0冊」と回答した割合は約62%(対象:16歳以上の個人)

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	0冊	1～2冊	3～4冊	5～6冊	7～8冊	9～10冊	11冊以上
H30年度	34.6%	49.1%	9.0%	3.7%	1.0%	0.8%	1.5%
H25年度	32.9%	49.5%	9.3%	3.5%	1.5%	1.1%	1.6%

⑩ どうすれば子どもがもっと本を読むようになると思うか

R7年度	
学校や家庭で必ず読書をする時間をつくる（時間を増やす）	54.5%
小さい頃から本の読み聞かせをする	52.3%
学校図書館や公共図書館に子どもが読みたくなる本を置く	29.1%
家族で読んだ本やおすすめの本について話をする	24.3%
学校図書館や公共図書館の居心地をよくする	17.5%
子どもがゆっくり読書ができる場所を地域に増やす	17.2%
テレビやインターネット、SNSでおすすめの本が紹介される	15.0%
学校で先生がおすすめの本を紹介する	14.7%
読書をしたくなるイベントがある	12.1%
有名人やインフルエンサーが読書の魅力を発信する	11.8%
地域の児童館や子ども食堂などと公立図書館が連携して、本の貸出をする	5.5%
身近に本のことを相談できる人がいる	4.7%
その他	6.1%

○「学校や家庭で必ず読書をする時間をつくる（時間を増やす）」、「小さい頃から本の読み聞かせをする」の割合が半数以上

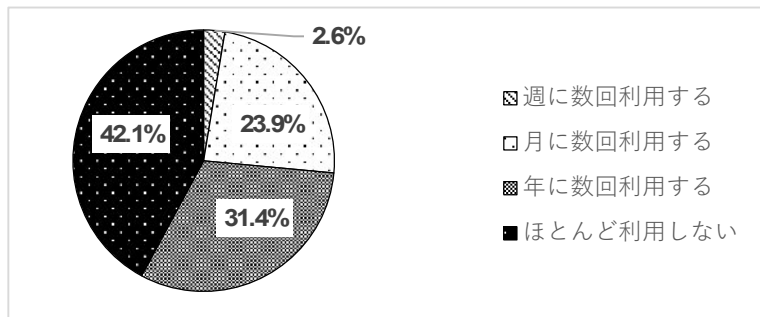
○「その他」の意見には、「親や身近な大人が読書を楽しんでいる姿を見せる」、「意識的な読書習慣の形成」、「気軽に利用できる図書館の存在」などの意見があった

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	H30年度	H25年度
子どもが小さいときから、親が本の読み聞かせをする	61.8%	64.1%
本を話題にして子どもと会話をしたり、親子で図書館などに行く	68.0%	67.1%
テレビ、ゲーム、携帯電話やスマートフォンに触れる時間を減らす	52.1%	42.9%
公共図書館の児童書コーナーや主に中高生向けの図書コーナーの充実	16.4%	17.6%
公共図書館でのお楽しみ会や読み聞かせなど本に触れ合う機会の提供	11.7%	13.4%
学校図書館の整備など学校の読書環境を整える	32.8%	36.2%
学校教育にもっと読書の時間を取り入れる	38.9%	40.0%
その他	8.4%	8.1%

⑪公共の図書館を利用することがあるか

R7年度	週に数回利用する	月に数回利用する	年に数回利用する	ほとんど利用しない
保護者	2.6%	23.9%	31.4%	42.1%



○「ほとんど利用しない」の割合が4割強

※平成30年度以前の調査結果は、令和7年度調査とは調査方法が異なるため、参考値として示している

	よくある	時々ある	あまりない	ない
H30年度	13.0%	25.3%	33.4%	28.3%
H25年度	13.4%	30.4%	29.5%	26.6%

⑫公共の図書館を利用しない主な理由

R7年度	
家から遠い	43.8%
図書館に行く用事がない	31.9%
そもそも、図書館に行こうと思わない	20.8%
図書館は古くて狭い	4.6%
おしゃべりができない	4.2%
図書館がどこにあるのか知らない	2.3%
図書館で注意された経験がある	0.4%
その他	26.9%

○「家から遠い」、「図書館に行く用事がない」「そもそも行こうと思わない」の割合が高い

○「その他」の意見には、「時間がない」という意見が多く、また「生活動線上に図書館がなく寄りづらい」、「不特定多数の人が触った本に心理的抵抗がある」、「子どもの本が少ない」などの意見があった

